505
54

505-54

白道をふむ人.

佛教協會編纂

（佛教文學叢書第三篇）

目次

聖典寓意譚集
本生物語抄
白道をふむ人

聖典寓意譚集

目次

ある兄弟と女……一
雪山童子の求道……二八
盧至長者物語……五二

ある兄弟と女

——姪慾に就ての話——

昔、印度の王舍城内の長者に、厲といふ人が居た。庫には金銀、衆寶、廣い豐かな田地、莊麗な舍宅があつて、又、牛馬奴婢等も數限りなく持つてゐた。彼は世間通途な人生觀をもつてゐる男であつた。しかし、巨萬の富を擁してゐる彼も人情の自然の力には打勝てない。子供のないことが悲しまれ、年老いてはいよいよ淋しみが、骨身にしみるのであつた。殊には、この國の法として、嗣子のない場合には、死後その財産を國庫に沒收するといふ掟だつたので、尙更に子のないことが悲しまれた。かくて、厲長者は、日月諸天や鬼神、又は九子母山神、樹神などに、子供の誕生を熱心に祈願した。彼の人生觀としては、自然さうあるべき

ことであるけれども、どうしたことか、子供は授からなかつた。厲はいよ〳〵あせつて祈願の念を增盛し、自ら山川の神祠に詣でゝ祈りに祈つた。

人間は、さう〳〵いろ〳〵なことに心配りをすることは出來ない。一心に子供のことのみを念じてゐた長者は、心も荒んできたので、產業は治めず、財產は次第になくなる。疾病、災禍は引き續いて起る、奴婢は逃げたり死んだりする、家畜は斃えないと云ふ有樣で、ほとんど氣も狂はんばかりである。焦せれば焦せる程事は成就しない。この頃の彼れの樣子は、盲目者が良藥と信じて毒を呑み、身を害ひ傷くる樣なものであつた。

長者は行きつまつた。かくて反省の時は來た。

「私は鬼神を祈る爲めに、殺生を事として、罪のみを重ねてゐた。此頃の自分はまるで人心ではない。この樣に迷ひ苦しんでゐては、來生は地獄に入るより外に仕方がない、おそろしいことだ」と考へて、尙ももの思ひに沈み、反省の糸

をたぐるのであつた。

「世には佛道と云ふものがあると云ふ。いままで私の信じてゐた敎よりは、道理に契ひ、尊い敎のやうに思はれてならない。德操の高い聖、仙德のある人々が敎團を形造つてゐるといふ。この人達こそは、ほんとうの道を修める眞人と云はねばならぬ。瑠璃の珠のやうに、心の淸淨な眞人達にこそ、まごころから、精進の念を起して會ふべきである。この佛道修行をする眞人達は、唯だ請漠を守つて、無欲無求であると云ふ。聖貧は、信の豐かさと心の平安の象徵である。現世に平安な、豐かな心で暮し得れば、來世は又、天上極樂世界に往生することが出來るであらう。私はこれから心を改めて、現世祈禱の山川鬼神を祠ることを止めて、正信の佛道に歸し、常に供養をなし、佛三寶を恭敬尊重しよう」と決心した。

二

厲が佛道に歸してから一載の後のことである。厲夫人は、玉のやうな男の子を生むだ。厲は非常に喜んで、佛大と名けた。佛にあやかる意である。それからは益々三寶に歸順し、供養にまごころをこめた。

しかるに、また一年ならずして、玉のやうに美しい男の子が生れた。で今度は僧大と名をつけた。長者厲は、この二人の子供を訓へて聖道へ導くことに、老さき短い努力とたのしみをつくいた。

弟の僧大は、資性仁愛深く、涙もろく、又孝心が厚い。厲の心を心とした。かくて佛法戒を口に誦し、沙門僧にも親しんだ。心は清く美しく自が境にわずらはされず安んずることを知つてゐた。厲夫妻は、僧大の人格を見て心に喜び、愛着することはまた殊の外であつた。

然し世はいつまでも平安には行かない。厲一家の上にも魔の手は下つてきた。厲はふとしたことから病みついて、餘命の迫つたことを知り、兄の佛大を病室に呼んで、遺言をした。

「世にはさだめがある、生れた者は死なゝければならない、ものみなは無常である。たゞ三界の唯一人者に在す佛陀の戒律を守るもののみは、必ず心安らかに身も晴々しく暮すことが出來るのだ。そして戒を犯すひとたちは、その身に恐ろしい苦患を受けねばならぬ。勿論世間からも、人の道を知らぬものだと擯斥されねばならない。弟の僧大は、まだ齡は幼いが、なさけ深く、涙もろい。だから孝順でもある。心は清い。立派な子供だ。この後は、どうか私になり代つて、一さう立派に生長するやうに敎養してやつてくれ。これが私の臨終の依囑だ」と、言ひ遺いて、間もなく敢なう死んでしまうた。

それからの一家は、悲歎に暮れたことは勿論であるが、また、小供二人の上に

は自覺が昂まつて、自らの新しい世界を創造することにもなるのであつた。

三

弟の僧大のやさしい弱々しい心は、又ものゝあはれをも感じ易く、父の死を見ては、ひし〳〵と世の無常、つれなさ、淋しさを感じて、「生」の問題に今更の如き新しい傷手をおひ、やみがたき厭離のこゝろにかられて、とうどう、沙門となることに決心するのであつた。かくて、兄の佛大に屢々出家したいと懇願するのであつた。がしかし、近親や父兄の心は、子供の本願を知らないものであり、認めないものであるのが常である。あの遊蕩するものゝ悔や惱みは、些しも理解されることなしに、無理强に、妻を娶らせたら、それで落ちつくものゝやうに事もなく見誤られる如く。殊にはこの國の習慣が、嫁の欲しいものは、ぢかに言ひ出すことの心恥かしくやましいところから、出家したいと申し出るのが習はせであ

つたから、今も、やるせない僧大のもとめ心は、すげなく嫁の要求と取り違へられた。で、父兄たちは、遽に人を四方に遣はして尋ね索め、やうやく快見と云ふ賢い美しい富豪の女を得て、僧大に娶はせることになつた。

快見は文字の示すとほり、顏は輝くばかりに華麗であつて見るも心地よい女であるが、しかしその美しさは、見て美しいばかりでなく、まことに、心の端正さをうつし出すものであつた。げに眞の美しさ快さは、內につゝむ心の美が外なる容姿に照り映えたものでなくてはならぬ。その全體的にほどよく調つた容姿と、その容姿に包まれるに相應しい貞淑さ、なさけ深さ、孝順さは、自ら美しく賢く尊しと思ひ貢りたがる嫉み深い世間の女達からすらも、歎賞されずにはおかぬほど美しいものであつた。その筈である。彼女等と比較すると快見は星中の月の樣に輝いてゐた。婚姻の日、九族、賓客が今日の慶びを祝ぐ時、兄佛大は、弟の醜い本心を見ぬいてゐるやうに思つてゐるので、嘲笑ふのであつた。

「卿はまだ出家したいと思ひますか」

しかし、僧大は眞面目にかつ眞心をこめて、

「出家は私の宿願です。どうか御父上のことも考へて許して下さい。かう申すのも、私は御父様が言はして下さるのではないかとすら思ひます」と答へた。

けれども、自分の心で推しはかつてゐる兄は、容易に疑をとらない。戯れ調子に、

「では卿の願ひに從ふことにしよう」

と輕く肯ふのであつた。ところが、眞面目な弟は、兄の言葉を信じて、心から御禮を言つて、即日入山學道に志した。

四

山中には年若い比丘がゐて、一樹下に坐り、手をくんで法を樂しんで居るらしい。僧大は虔ましく稽首いて、

「聖賢は何に依つて佛道に入られるやうになつたのですか」と尋ねた。其年若い比丘は、もう眞實の道を悟つて居るので、無數劫の先を洞見すことが出來るから僧大に言ふのであつた。

「釋尊は經典中に次の樣に申してゐられる。人が婬泆を好むことは、炬火を捧げて大風に逆つて行く樣なものである。焰が燃え切らない中に地上に捨てなければ、手を燒いてしまふであらう。または、鳥が肉を銜へてゐるのを、鷹鸇が追ひ爭ふやうなもので、鳥が早く肉を捨てないと身が危くなるのである。婬欲はかやうに恐ろしい危かしいものである。もつと添け加へて云ふと、小兒が蜜を塗つた利刀を、おいしさに惹かれて貪り甜めるやうなものである。舌を截られるのも知らずにゐる。または餓ゑた狗が、路の邊で枯骨を拾ひ咬んで、口を傷き、齒を痛めるやうなものである。戀ふるものは、夏蟲の燈に迷ふが如くであり、戀はるゝものは道の邊に咲き匂ふ花のやうなものである。危かしいものを

慕ふ爲めに身を危くし、美しきが故に旅人の爲に折られ傷いて、終には凋落するのである。色欲は苟めの快樂であるのに、愚なものは後々のことを考へずに樂しさを貪つて身を傷うてしまふ。婬泆は毛すぢほどの眞の幸福もない。自己を眞實に生かすものではない。然るにこれに惑ふものには、盲目的な、善惡正邪をも辨へない程力强い蠱惑をもつてゐる。人生の本能力は恐ろしい。かくてこそ、聖賢はこれからいよ〳〵遠のくべきものであることを知るのであるが、愚者は、この苟めの樂しみにふけるものである。婬泆の禍は延いては國を亡ぼし、自分は地獄の苦患に苦しめられることゝなる。佛陀は諦にかく聖き敎を垂れ玉うた。比丘はこの敎から僧侶となつて、心淸く佛戒を守つてゐて、世俗の人々を見るに、彼の人々の誤つてゐるのが、恐ろしく齒がゆくてならない。かくていよ〳〵佛恩の深いことを思ふのである」と虔しやかに懇切に說くのであつた。僧大は謹んでこの言葉を聽き終へて、頓首し、足下に跪いて、

「佛陀はまことに、尊い聖者でましますことはかねてから存じてゐました。人天中で最も勝れた方とも存じてゐました。が今更にそのことをしみじみと味ひます。經典の敎は實際愚痴を滅します。私も御話を承つて一層、世俗を去つて淸淨な佛の道に入る覺悟がつきました。いままでは新妻のことを思ふまいと思つても思へてならないのでしたが、これからは、その代りに道にいや更にいそしむことゝいたしませう」といつた。

この後、僧大は數ヶ月の間この沙門を師として侍いたが、寂靜の地が、禪定の心を養ふには適はしいと思つたので、師に申し上げて見ると、師は、いろ〳〵の心の惱み患ひは、獨りでゐると尙募ることを敎へたが、僧大は、やはり山中寂靜の地へと、心を禪める爲めに志して進み入つた。

五

兄佛大は、快見の美しさに魅了し去られて、一日琴を彈じて彼女を誘惑しようとして、

「美しく咲き亂れた花も手折らずに時が過ぎると朽ち凋むばかりである。卿は美しい。私の心は迷はされた。卿のあでやかさ、美しさは、日々に新しさを增してゆく。私は、卿が私と歡樂を共にして、私の誠心と情とに醉うてくれたら、さぞかし樂しいことだと思ふ。弟僧大は山に入つて沙門となつてしまつた。まだ確な契も結ばれてゐないのであるから、かまはないではないか。よも姦姪ともなるまい」と歌ふのであつた。すると、快見も歌で、

「我師釋尊は、崇く尊く端嚴なことは、巍々たる瑠璃山が蒼穹に高く聳ゆるが如くである。その師へみほとけを慕うて行く夫僧大の心こそ慕はしい。二夫に見えることは恥ぢなくてはならない。道ならぬことを敢てする位ならば、一層死んだ方がいゝ。卿の愛着の切な心は察しられる。けれども、この世の制約、眞

理を無視することは恐ろしくなげかはしいことではありませぬか」と、訴へるのであつた。

佛大の心は、女に拒まれ背かれて、いよ〳〵募るばかりである。情悲の曲、委靡の辭を制作して、更に快見に迫るのであつた。

「すでに心のきりつとしてゐることが、美はしい顏にも姿にも現はれてゐる卿を見てからは、私の心は怡々としてゐて、歡を共にし、卿の情に醉はなくては堪へられない」と。快見は女であるから大變に困つたけれども眞心は變らない。僧大がいよ〳〵慕はれるばかりである。日頃見て居た經說を歌うて、兄佛大を誡めんとして、

「空なる容姿よりは變らぬは信實の心である。肉體は移り易く穢れて居て醜い。清い魂こそ尊く美しい。佛の儀禮には尊卑にも叙がある。叔妻は子であつて、聟伯は親である。卿の御言は到底聞かれないではありませぬか」と彈ずるので

あつたが、佛大の心は容易に變らないばかりか、益々つのるばかりである。快見は又さとすが如く、兄佛大に言うた。

「女の守りしりぞけねばならぬことが二つあります。その一は不孝で、二は姪亂であります。これは佛も戒めて居られる。妾のことを思ひきつて下さらなくては、二人共に困るではありませぬか」

六

かくの如くして、佛大の戀はしば〳〵斥けられたが、尙も執着は增すのみである。快見の光顏(かほばせ)は光り輝いてゐる。普天の美女もかくはあるまいと思はれる。佛大はそれを日々見てゐるのであり、戀のいきさつはかくの如くであるから、心は悶え苦しむ。快見は兄の心を察してしかりいさめるのに手を盡すばかりである。

「夫僧大は佛弟子です。私もその妻であるから比丘尼です。して見ればどうしても佛戒を犯してはならない筈です。女は外見(みめ)は美しいが身中は惡露不淨です。卿は、私の肉體を求め望まれますが、肉體は好むべきものではありませぬ。頭には九骨あつて合して髑髏となつてゐます。その中には腦があります。顏には七つの孔があるが、皆洟唾を出します。皮が肉を裹(つつ)んでゐるので、美しく見えるのです。身體には毛髮爪齒皮肌血腦骨肉があるばかりです。足は脛と連つてゐます。髀は尻とつながつてゐます。尻と腰、腰と脊、脊と脇、脇と首、頸と髑髏、臂と肘、肘と肩と連つてゐます。女は畫瓶(かめ)の樣なものです。外は美しいが、中には尿屎(いばり)が盈ちてゐます。身中は不淨です。貪り愛すべき何物もありません。凡愚は肉體を求めますが、心が賤しいものであると蔑まれます」

といさめるのであつた。

七

兄佛大は、女が言葉を素直に受けず、從はないのは、まつたく弟への愛着のためだと思うたので、遂に弟を亡き者にしたらといふことをさへ考へるに至つた。そして、罪を罪とは思はぬ賊徒らを探し求めて、酒家につれこみ、

「君達に逢へて大變嬉しい。實は私の家にゐた奴隷が逃げ出して沙門となつてしまつたのだが、今山中で修行をしてゐる。一つ捕まへてはくれまいか」

とたのみこんだ。もとより賊の頭もさる者であるから、兄佛大の樣子や言葉で、事の始末を知つて、金銀を受取つて、奴隷を殺し、頸と衣服と所持の法杖と履屣(はきもの)とを持ち返つて、重ねて金銀財寶を豐かに與へられることを約し、弟僧大である奴隷の容姿、特徴をよく聽いた上で、山に入つて探ね求めることを快諾した　彼等は人の氣うすい深山の奥をあちこちと訪ね歩いて、漸く僧大のゐる所を見つけ出すことが出來た。彼等は事しおほせたりと喜びながら、遽に荒々しく猛り立つて「沙門、用事がある。出て來い」

と太いだみ聲で叫んだ。僧大は時が時であり、聲が聲であるから、かつ驚きかつ不審には思つたが、震へる聲をしづめて、努めて平靜に粧ひながら、

「これはどなたかは知らぬが、何御用あつてこの夜中に御出下さつたか……」

と云つて、門邊に立ち出で、星光に彼等をすかして見た。すると、そこには恐ろしい嚴しい容貌(かほつき)をした荒らくれ男が幾人か、ひどい身裝(みなり)で立ちはだかつてゐるのを見出した。彼は飢渴に苦しむ乞食であらうと思つたので、

「水火麝蜜ならばありますが……」

と言葉優しく云ひ足した。けれども彼等は益々猛々(たけだけ)しく、

「俺たちは水火麝蜜などを求めてゐるのぢやない。また時などを聞いてゐるのでもない。俺等は御主の頸をもらひに來たのだ」

と云ひつゝ、ぢり〳〵と詰寄つて來る。僧大の驚きと恐怖は頂天に達した。そして道に志して道未だならざる己が本願を顧みては、悲痛極つて泣くことすら出來

ない。

「私はもと長者の子であつたが、今は長者や諸侯の子ではない。在俗の姿形をすてゝ佛道に入つて居ます。世の人々のやうに爭ひ怒り呪ふなど云ふ荒々しいことはしたくない。また、してならないことにもなつて居る。一たい、道を學んで居る私には、敵を作つたやうな覺えもないのに、何故殺さうとなさるのか。どうかその理由を聞かせて下さい。私は學も德もまだ進まず、最初の證の溝港道すらも得て居ませぬ。眞の六神通もつかふことも出來ませぬ。今殺されるとしても、これが一番心殘りです。どうぞせめてもに、その理由を聞かせて下さい」

と言葉やさしく、震へを帶んだ聲で訴へ願ふのであつたが、しかし、賊等には無論そんな情けなどのあらう筈がない。却つて僧大の哀願は一さう彼等を面倒くさく思はせた。

「俺等は汝の頸が欲しくて來たのだ。あはれな聲ではざいたつてあかぬわい」

と、氣短かに駑號りつけた。

その時僧大は、

「ひよつとしたら、賊等は私の家の富んで居るのを聞いて、私が財寶を持つてでも來て居るやうに思つてゐるのでなからうか」

と思ひついた。で、

「皆さん、もし、財寶がお望みなのでしたら、幸ひ私の俗家は富んでゐます。家には兄がゐますから、添書をつけて卿等に惠ませることゝいたしませうが」

と、まことを盡いて親分らしい男に賴みこんだ。そのいぢらしいほどに素直でやさしい至純な僧大のたましひには、さすがに荒みきつた彼等の心にも、聖く尊く響いたのであらう。もう秘しきれなくなつて、とう〳〵

「實は、その兄樣が私等をたのんであなたを殺さしめるのです」

と、氣の毒さうに具しく告白した。

僧大は、あまりな事情にうちおどろいて、

「今私が死ぬのは女に依つてゞあるのか。師は先に私を誡めて、明瞭に色欲の恐るべきことを敎へてくれられた。いまになつては嘆いても初まらない。どうかもう一年活かしておいて下さい。そしたら私は得道することが出來るでせう。得道は私の念願です。證を得れば必ず恒に此處にゐます。その時に殺して下さつても悔みはありませぬ」

と、本願を念じつゝ縋るやうに願つた。けれども、賊等は己が單純な心で僧大の心を計るから、それは命がをしまれるからだとしか思はれない。

「俺等は佛大樣の命令で今子の頸がほしいのだ。何故一歲待てと云ふのかよく解る。道を修するものが得道してしまへば、神足を得て、身輕く空を行くことが出來るではないか、その時には俺等こそいゝ面の皮だ。一年も待たれるものか

今頸を取つて行く」

と、いやさらにいきり立つのである。僧大はかくてはせんないことであるから、心に思ひ決するところがあつて、

「では殺すのは暫く待つて、先づ一脾を斷つてくれ」

と云ふ。賊等は喜んで、閃かして持つてゐた刄で左の脾を斬つて前に置くのであつた。ほどばしり出る血潮と、斬られた一脾を見ては、痛みがたへられない。天に向つて慟哭した。すると、天人は空より下つて僧大を勵ました。

「慎んで恐るゝな。なんぢの心を牢く持て、子は前世にはもつと激しい痛苦を忍んで來てゐるではないか」

と。弱い心の時にはかくの如き誡めは必ずあるものである。僧大は天に向つて叫んだ。

「天よ。願くば私を哀れんで、師に私の今死ぬることを告げてくれ。師が道を示

してさへ下されば、生死位は物ともしない」。

天人はこれを聞いて直ちに走つて師に告げた。師は神通力を以て空に乘じて僧大の處へ來た。

「天地須彌も滅壞する時がある。大海も消竭る。惟嵐と云ふ大暴風が吹く時には山と山とが互に相搏つて崩れてしまふ。この風もなくなる時がある。子の小軀は天地に比べると大海の一滴にも等しい。物の數ではない。死を思念する時はたゞ佛を念ずるがいゝ。佛は常に世を無常であると說かせられた。盛なるものは必ず衰へ、會つたものはきつと離れることがある。榮位、財寶は長く保ち得べきものでないと申された。念佛、合掌するがいゝ」

と親切に敎へた。信賴した師の言葉は、常に增して身にしみて、尊く聞かれた。

僧大はかくて第一の證、溝港道を得た。左手を斬られて、敎誡を念じ心からの禮讃を捧げると、第三の證、不還道を得た。右手を斷たれて第四證應眞道を得た。

かくて、三惡道を畏れず、生死自在の境に入ることを得た。

僧大は賊に命じて樹皮を取らしめ、枝を以て筆となして血書で記すには、

「大兄起居安らかにましますや。正しくまた善德を具へて暮し玉ふや。私達は兩親のこの世にゐます時も孝を盡したとは申されますまい。なくなられました今日また女色の故に慈親の敎命に脊いてゐることは悲しいなさけないことです。殊に骨肉相殘害するとは不孝も甚だしいことゝ存じます。人命をとるのは不仁ではありますまいか。一畜生を殺した罪も輕くはないと申します。然し私は今安らかに人をも、卿をもうらみ呪ふやうなこともなく、光り輝くやうな豐滿な魂を抱いて、寂寞の境に入ります。この上は大兄が、正眞の道を崇め尊んで、恥かしい、いとはしい行をよして頂くことのみが氣にかゝつてゐます」

と書きつけ了つて、兄を念ずる樣な面持をするのであつた。

僧大の慈仁な心は賊等にも及ぶのであつた。頸を長くさし伸べた僧大は、

「卿等、私の頸を斬り取つても泥に汚さない樣に氣を付けるがよい。然らずば、卿等は後世地獄に墮ちるであらうから」

と自が死に瀕してゐるのをも忘れて人の身を思念してゐるのであつた。

八

賊等は斬り取つた頸、上衣、法杖、履屣及び鐵鉢を兄佛大の所にもつて行つて重く謝せられた。

兄佛大は、賊等の持ち來つた弟の頸や持ち物を以て僧大の假裝を造つて病人を裝はさせ、快見を侍らしめて、自分の戀心を滿たさうとした。

「快見よ。卿の婿は歸つて來た。會つて語るがよい」

彼はやさしさうに言ふのであつた。兄の今日の言葉をいぶかりながらも、愼しみ深い彼女は、はしたなく本心を見せる女ではないが、餘りの嬉しさに容姿にも喜

びを現はして、物腰もいそ〳〵と僧大の室に入つた。佛大はこれを見てにが〳〵しく思ふのである。

僧大は死んで居るので目を閉ぢて坐つてゐる。彼女はまだ氣附かない。物思に沈んでゐるものと思つて、賢い彼の女は沈思が終つてから食べるべき美食を造ることゝした。日中になつても目覺めない。不思議に思ひながら、

「もう晝日中ですよ。遲くなりすぎはいたしませぬか」

と袖を惹いて起さうとすると、忽ち頸が落ちた。五體に觸れて見ると氷の如く冷たく、四肢も離れ離れになつてゐる。愼しみ深い彼女もこれを見ては氣も狂ひ、心もそゞろに、

「子は妾の爲めに怨府となつて傷ましくも殘害され給うたのですか。このやうになることなら外にしようもありましたのに……」と泣き號んだ。

か弱い彼女のこととて、哀傷、悲苦、胸を破つて咯血が斑爛と散つて、奄忽の

間に息も絶えた。

「快見は心清く戒行をも修めてゐて、汚されず、澄んでゐることは、晴れた蒼空の如くであつた。また聖範を心としてゐて、動かないことは大地のやうであつた。世にある時、操貞しく、行淨きこと天上の少女にも似て居た。死する時は諸天が咨嗟へてその魂靈を迎へた。須臾の婬欲を忍んだ爲めに天上の盡きせぬ榮光に浴することが出來た」と時人は歌うた。

九

兄佛大は僧大の室の騷々しいのに快見がどうかしたのかといぶかつて、室に入つて見ると、弟の頸と身體とは分れ分れになつて狼藉し、快見も血を吐いて死んでゐる。今迄の花の光顏も色あせて黑づみ、かつ淋しさうに、哀れさを誘うてゐる。この態を見て、佛大の心にも遂に悔いの芽生ゆる時が來た。

「あゝ、私は天に逆つてゐた。誤つてゐた。私のしたことは、いかに本能の情念がさせたことゝは云へ、大それた惶怖しいことであつた。今こそ漸くそのことを知つた」と云つて、賊を訪ねて弟僧大の死の樣子を聞いて、肉弟の血によつて染められた遺書を受け取り、開いて見れば、哀々懇惻の辭で充たされてゐる。その精神は、今の彼には、皮肉にも深く强く抉るが如くに響いて來る。讀み了つて、心噎塞つて、ひたすらに弟の淸德を歎賞せずにはゐられなかつた。やがて、懇に弟を殯葬して、四輩の塔を立てゝ奉仕した。この聖き悔の奉仕には、天も龍神も空を覆ふばかりに群集して、散華燒香至らざるなく、時人も皆心を痛め、嘆かざるはなかつた。

妻快見も國の擧つての葬を受け、哀しき歎賞の聲が國に滿ち、人を動かした。

——(竟)——

雪山童子の求道

——求道と布施——

序詞

たとひ大千世界に
みてらん火をもすぎゆきて
佛の御名をきくひとは
ながく不退にかなふなり。——親鸞

第一場

時——遠い〳〵昔、未だ釋迦佛のゐまさない時代。

處——印度の北に聳え立つてゐる雪山の山中。

こゝがしこには、人の心をすが〳〵しくするやうなさはやかな泉がある。岩間や樹々の間には、さらさらとせゝらぐ清い流れがある。樹々は蟲々と立つてゐ、鬱蒼と繁つてゐる。岩石も崎嶇として立ち並んでゐる。あたりには香はしい香と、あるひは華かな、又あるものは淋しく淡い花をさかせ、草花は咲き亂れて芳ばしく匂うてゐる。雲間には、衆鳥も囀り、林間には、禽獸もかけり住んでゐる。童子すがたの雪山童子出でゝあたりをさすらふ。

童子　私も長い間、いろ〳〵の苦行を嘗めて來た。禪(しづ)かに心を澄して、禪定に入り、思惟を凝してもみた。それでも心にかゝつてゐることは、まだ、はつきりしない。しかし、少しづつは、はつきりとしてくる。まだだん〳〵冴えてはくるやうだ。（自分に云ひふくめるやうに）さうだ、曠い廣い、そして遙かに遠い行く手にあつた道も漸々狹くなつて來た。たゞ一筋の、はつきりした道になつて來た。（思ひかへして）然しまア、かうした草の根や、果の實を食つて、草露の身で、獨りわびしく、どの位の星霜(としつき)を暮すことであらうか。靜かな、おちついた生活ではある。だが望むでゐることはいつ成就することかしら。

（泉のほとりの岩に腰をかける）

今日は晴やかな日だ。昨夜は、いろ〳〵の獸が來て、傍で終夜、戯れ廻つて寢させてくれなかつたので、かう晴やかに輝くと、目まひがしさうでならない。頭も重いことだ。けれども、あれらも可愛い奴等だ。私もまだ、人と云ふ制約の中にゐるのだから、あゝ終夜戯れられると心苦しい。三四日無理な生活をつゞけたためでもあるが、身體も疲れきつて綿のやうだ。耳鳴さへする。でも以前のやうに目がかすんだり、物音や水のせゝらぎが、遠くに響いて居るのか、近くにあるのかわからないほどでもない。あの時は、烈しかつた。いままでしてゐたことや、されてゐたことが遠い昔のことのやうで、過ぎし日の思出をたどつてゐるやうにすら思はれてゐた。（横になつて）では一休みするとしようか。

（寢こんで、夢みる）

釋提桓因初め、諸天が天上界の燦然たる廣やかな宮殿に集まつて相談をしてゐる。雪山童子のことを

相談してゐるのである。童子のこの修行の圓滿に成就することを恐れ、何が故にかくも熱心に修行してゐるかを驚き怪しんで、鳩首會議を開いてゐるのである。

その一、一天子　あの清淨な御山、雪山の中に住まつてゐる童子は、寂靜な魂の持主である。功德で莊嚴されて身も心も嚴られてゐる。殊に世のけがれであり、濁りである、貪欲、瞋恚、我慢の愛欲からは、已に拔け出でゝ、自由な心になつてゐる。諂曲、愚痴など云ふ惡德は、永遠に斷ちきつてゐる。曾つて、麤々しい粗惡な言葉でもの言うたのを聽いたこともない。

その二、歡喜天子　雪山童子のやうな我欲を離れた、清淨な精進のみを、いそしみ勤めてゐるものは、きつと、帝釋天や諸天になりたいと願樂つてゐるにちがひない。あのすさまじい苦行を修める求道の相を見ても、それが知られるではないか。きつと帝釋天の玉座を樂つてゐるにちがひない。

その三、仙天子　帝釋天王、憍屍迦さま、あなたは歡喜天子の申された雪山童子

が、あなたの玉座を願つてゐると云ふことで、憂慮される必要はありませぬ。童子のやうな、純粋な求道者が苦修練行してゐるのは、必ずしも天の樂を目的としてゐるからではありますまい。もつと童子の本願は尊く眞實なものであつて、無目的な體驗でせう。憍屍迦さま。世の中には、さうした勝れた聖者大士もあるものです。その秀でた大士こそは、衆生をいとしみ憐れんで、自が身の事はいさゝかも考へず、自分の爲めに貪るなどと云ふことは少しもいたしませぬ。無量の苦行をするのは、衆生を利益しようとしてです。かゝる聖者は、生死の中に處しては、男女間の戀愛や、横暴極まる經濟關係は勿論、いたましい過失や罪咎の生起るのをぢつと靜觀してゐるので、珍らしいまた尊い寶が、山と積まれてゐようとも、大海中に滿ち滿ちるほどにそれがあらうとも、少しも貪著する心を起しはしないのです。累ねられた財寶も、彼にとつては、涕唾のやうに輕んぜられてゐます。それほど財寶に對しては、財寶に纏縛られない、自由な心を懷いてゐるので

す。又かく財貨、寶石に對して染み着く心がないばかりでなく、愛着重なるべき妻子や、舍宅、奴婢、僮僕、車乘、象、馬、自が身命をも、眞理に對する時は、一段ひくい何等の意味のない、單なる物質に過ぎないものと信知してゐるので、自然法爾な、少しもこだわりのない自由な心を體驗してゐる。だから天上界への昇天を願求するやうな筈はありませぬ。たゞ願望としては、一切衆生が澄淨な快樂を受くるために、本氣に自が業にいそしみ、眞實に眞理の存在、法の實在におどろき、眞理と法の探求を願求するばかりでせう。私はかやうな染着を離れ、結ぼれ合うた糸くづのやうな煩惱を長く斷ちきつた聖者は、たゞ菩提の道をのみ求め、清淨眞實な生にいそしんでゐると思ひます。

帝釋天王　仙天子の申さるゝやうならば、あの雪山童子は、一切の衆生を攝取し匡救ふ佛である筈だ。さやうな佛が世に出現すれば、あらゆる悲苦、憂悶に惱める人天、阿修羅を救ひ、降つては毒蛇のやうな煩惱を殲滅するでせう。炎熱の太

陽の下に旅人に與へられたる涼しい樹蔭のやうな佛の庇護の下に、一切衆生が集まれば、煩惱も害毒も消滅されるに違ひない。かやうな崇高い大士がこの未來濁惡の世に於て善逝となるならば、我等衆生のたえまもなく熾盛に燃えさかつてゐる火のやうな煩惱も消除されることでせう。そんな有難い事實は信じられない。限りもなく、量り知られない程の衆生が、菩提心をおこすけれども、決定心がないために、少し大きい躓きがあると心が動いて碎けてしまふ。確實な心をもつてゐないものは、末とほつた事は出來ない。水中に映つてゐる月影は、水に小波が立つても粉微塵に碎けてしまふ。繪畫、肖像を描くことは難かしいけれども、それを壞すことは何でもない。菩提心も一寸は發すけれども、最も壞れ易いもの〻一つである。軍人が、皆堅固な鎧仗を着けて身を莊嚴つてゐる間は、今から前進して敵を討伐して見せると云ふ意氣込でゐるが、さて敵陣眞近まで來て見ると、恐怖心を懷いて、逃走退散するものが多いやうに、菩提心を發すときは、外はい

かにも嚴めしく莊嚴して、これでいゝと信じてゐても、長の生死海中に浮沈しては、過失を起し、愛欲苦惱を嘗めては、ぢき菩提心を消失してしまふものです。

仙天子さま。私の見るところでは、かやうに無量の衆生が發心はするけれども、暫くすると皆その尊き菩提心をなくしてしまひます。だから、私は今、あの雪山童子が、苦修練行して尙曾つ惱みなく憂なく、煩惱から自由になつて、慈悲に飽滿した心で、險しいあの苦行の道をたどり、如何なる小さい行も清淨でないものはない程に恭敬の心をそゝり立て、崇高さへも保持つてはゐるが、まだ深信することは出來ません。私は今から往つて雪山童子の菩提心を試めしてやらうと思ひます。ほんとうに阿褥多羅三藐三菩提の重擔を脊負うて、險難の道をたどり得るかどうかを試めしてやらうと思ひます。

仙天子さま。車は二つの輪を持つてゐるのであるから、能く物を載せます。鳥は兩翼があるので、荒い雨風の時も堪へて飛ぶことが出來るのでせう。苦行者だ

つて同じことです。私は、堅く禁戒を持つものでも、一概にその人が深智あるものとは思ひたくありませぬ。理想の光りがはつきりと輝いてをり、深智深慮があれば、必ず阿褥多羅三藐三菩提の重擔を脊負うても、險しい道をも、ものともせずに堪へられるのですから。仙天子さま。魚は澤山の卵を生みつけます。けれども、立派な一人前の魚となるのは、ごくわづかしかありませぬ。菴羅樹といふ樹の花は、山のやうに咲き香りますけれども、熟して果實となるのは、ほんの少しかありませぬ。菩提心を發す衆生も多いけれども、それを成就させるものは、實に又尠ないこと言ふに足らない位です。私は、今、雪山童子を試してやらうと云ふ心が強く動いてゐます。試すにはどうしたらいゝでせうか。さう〳〵、金を試すには、燒、打、磨の三種があります。

（天子達漸次現實の相より離れてぼんやりし出す。終にはすつかり姿を消し去る）

（雪山童子夢より覺む）

童子　あゝ、あゝ、夢だつたのか。（立上りつゝ）おやこの岩の上で眠つてゐたのだつた。ぐつすり寢込んでしまつてゐたのだな。あゝ、晴ればれしい心地になつたぞ。これでいゝ。（思ひ返して）それにしても、あの夢は何と云ふ夢だつたらう。この私を賞めそやしたり、疑ぐつて見たり、何か惡者のやうに考へたり、私の菩提心を試してやるのだと言つたりしてゐたではないか。（これより奥深い林中へたどつて行く）だがあの夢がはつきりと思ひ出されること！。仙天子の私を批評する言葉はどうだ。氣味惡い程私のいゝところを知つてゐるではないか。又外の天子達や、帝釋天王の言葉も、又、私の心の一面をうがつてゐる。おそろしく自分の現實に當篏つた夢だつた。自分に反省しても、自惚があつてこんなに確に正しくは洞察されるものではない。あの水の面に映つた月影や、鎧仗を着けて敵陣に乘り込む軍人の譬へを出して、菩提心を論じてゐたあたりから後の言葉はどうだ。氣味惡い言葉だつた。胸惡くなる程私の弱い處を刺してゐたではないか。私の今後の凶

徵を示してゐるやうでたまらない。（と云ひつゝ物思ひに沈みて、奥深い林間に入り込んでゆき漸次樹の間隱れになりて姿見えなくなる）

第二場

時——次の日の朝まだき。すがゝしき朝。

處——同じき雪山の奥深き山中。幽邃の度深まる。靜けさ身に迫り、猛獸の遠吠の聲聞えて、一層の靜けさを知らしめる。その間に清き流れのせゝらぎと、奇しき小鳥の音交り洩れ聞ゆ。奇岩、巨石並び立ち、種々樣々の樹々茂ること前の場の如し。一羽の鳥餌をついばみ來り又飛びて林中に隱る。後、暫く靜寂。

（やゝ暫くして童子出づ）

童子　今日も又いゝ天氣だ。山中は又殊の外山氣が身に迫つて肌を刺すやうだ。何といふ靜けさだ。すがすがしい心地だ。昨日の夢が氣にかゝらなければ、もつと安らかな靜けさが味はれることだらうに。どうも昨日の夢が氣になつてならな

い。こんなに氣になるのは、きつと何か變つたことが起るのに違ひない。それとも私の心が少し狂うて來たのか知ら。まさか、さうでもあるまい。やはりきつと何か變つたことがあるのだらう。

（ぼんやり物思ひに沈みて、鬱蒼たる大樹によりそつて立ち、その蔭に休む）。

（遙か遠い谷間から、羅刹（らせつ）出づ。始め眞紅の衣のみ見え、後近づき來るに隨つて畏ろしい相貌、又相の上には心の勇健さを現はしてゐる。當るべからざる勢である。童子の方へ勢猛く進みよる。途々、ほがらかな聲調で、意味をなさないことを高く或は低く言ひつゞけて來たが、漸次聲に清雅な味を加へて童子の傍近くまで來て止まり、澄みきつた聲で、過去佛の說かせられた、半偈に言ひ及ぶのであつた）。

羅刹　諸行無常是生滅法（しょぎやうむじやうぜしやうめつぽふ）（もの皆は常なし生れては滅ぶ）

（半偈を說き終つた羅刹は、童子の傍近くにて、益々怖畏すべき形貌、姿となる。鋭き眼にて四周を顧盼遍視するのである。童子は、羅刹の谷より出づる時から凝視をつゞけてゐる、容貌の怖畏すべきに似ず、聲の朗かであり、清雅な味のあるのに、童子は驚異せる色が現はれてゐる。殊に最後の半偈を聞くに及んで、歡喜の色を相容（すがたかたち）の上に現はす）。

童子　昨日の惡夢のこゝろが漸くわかり出して來た。昨日からの無氣味な氣持が晴れて行くやうだ。（眼を擧げてはれ〴〵しい顏附となる）あの澄んだ調子の聲で、諸行無常、是生滅法と響き渡つたとき、私の心の奥底まで、喜びがしみ込んで行くやうであつた。賈客が險難な夜路、陰暗い處を伴の者と、月明りのみをたよりに、とぼ〳〵とたどる時に、伴の者を、ふとしたはづみで見失つてしまひ、怖ろしさにまけて、一生懸命に伴の者を索ね求めて、物影などで又再び偶然に遭遇した時の歡喜、踊躍のこゝろもちもこんなだらう。久しい間、重いいたつきに伏してゐてなか〳〵良醫に遇へないので、ふさはしい藥にありつけないでゐる中に、ふとしたことから、良醫に遭へた時の喜び。大海におぼれてもう死なねばならないと心配してゐる時に、てうど通り合はせた船に救助された喜び。廣漠たる砂漠の中で口が渴いて困りきつてゐる時に、清冽な泉を見出した時の歡び。農夫が炎天續きで旱りで困つてゐる時に、大雨に値うたその歡びにも比すべきものであらう。

私はあの半偈を聞いた時には、ぞつとするほどの歡びを感じた。私は知らず知らず、居ずまひを正して、手で髮の毛を握りしめて、四方を顧みた。羅刹が說いたことを知りながら、羅刹が說いたとしては、あまりに奇異にも不可思議な尊い言葉だつたから、何か外のものがゐて言つたのではないかと思つたからである。然しよく見定めてみても、たゞ羅刹がゐるばかりである。かくては最早どうしても、羅刹が說いたのだと思ふべきであるのに、羅刹の言つた言葉としては餘り奇異な言葉なので、やはりさうだとは思ひきれない。（考へる）誰がかやうな解脫の門を開いてくれたのであらうか。誰が、震雷の轟くやうに諸佛の音聲を響かせたのであらうか。誰がこの生死苦海の中にあつて、總ての者が眠りに耽つてゐる中に、獨り悟り寤めてゐるのであらうか。また誰がこの生死海中において、尊い知見に饑餓てゐる衆生に、無上の道味を示してくれるのであらうか。誰が生死海中の波の中に浮沈してゐる苦惱の衆生の爲に、大船師となるのであらうか。ありと

あらゆる衆生は、煩悩の重病に纏縛られ、しかもそれすら知らないでゐるのに、誰が選ばれたる良醫のやうに、これを癒してくれるのであらうか。かく考へつめて見るけれども、羅刹の外に誰一人として考へ及ぶものもない。このやうに尊い教を、この羅刹が説いたのであらうか。この羅刹は又、その容貌が非常におそろしい。こんなおそろしいものゝ口から、かうした尊い教が出るものであらうか。こんなに恐怖すべきまた醜く陋しい者から、この尊い半偈を聞いたとしたら！、あゝそんなことはあるまい。然しひよつとして聞いたとしたら!!、おゝ！そしたら、この畏ろしさも醜さもかき消されて、冴え磨かれた魂の尊さのみが輝くであらう。さうだ、火中に蓮華が咲き出でたやうなものだ。冷水中から光り輝く日光が微笑み出たやうなものだ。とにかく私は、この半偈を聞信して、私の心は啓かれた。私の心は悟つた。けれども、それは眞赤に咲き誇るべき花の蕾が、微笑み出したやうなものだ。秋の澄んだ月が雲間に半ば影を出したやうなものだ。それ

だけで風情をとゞめてはゐる。それは全體を知りたいと云ふ欲求をそゝるから、一層の美はしさに輝くのである。私も今、この半偈で飛立つ思ひをした。それは突然によいものに接した驚きである。花や月の半ばかくれてゐる風情に等しい感じからでもあらう。けれども、けれども、私は全體が知りたくてならない。私はまだ知らないのだ。さうだ、知らないのだ。或ひは、この羅刹は、過去の諸佛に詣でて、諸佛の説かせられた偈文を知つてゐるのかも知れない。私は今こそ羅刹に尋ねて見よう。

（童子、決意の色を現はして怖るゝ氣色もなく羅刹に近よる）

童子　大士羅刹さま。あなたがあの尊い半偈を申されたのですか。さうでしたら教へて下さい。生死苦海の怖れを離れしめる半偈を、あなたはどこで得られたのですか。あるひは、どなたかから學ばれたのですか。この如意寶珠のやうに光り輝く言葉は、三世諸佛世尊の正道でせう。未來五濁の世に住む無量の衆生は、皆

生死界や地獄に繫がれる煩惱、邪しまな諸見等にまどはされることでせう。そして終身、外道の敎を尊きものと遵奉してゐるでせう。私はいままで、かやうな殊の外秀でた雄者たる如來樣の說かせられた、空眞實の義を知らなかつたのです。だのに、今やつと聞くことが出來たのです。私は全部が知りたいのです。どうか後の半偈も敎へて下さい。私の心は、敎に飢えてゐます。（低頭して禮拜を捧ぐ）

羅刹（けろりとして）大婆羅門、雪山童子、あなたの聞きたがつてゐる心持は、よく理解ります。然し今あなたは、私に半偈を問うてはいけない。私は、もはや十數日の間何も食べてゐない。到る處で食べ物を索ね求めたけれども、得られなかつたのです。だから、偈文を問うてくれては困る。飢渴苦惱の心が心を亂してしまつて、おもひもよらぬ誤謬の言葉を出したのでせう。私の本心は一向知らないことです。私は蒼々とした虛空まで飛ぶことが出來る。又鬱單越といふほかの世界や、天上界にまでも至ることが出來る。されば、さうした遠いところまで行つ

て、食を求めたけれども、得られなかつたのです。だから問うて下すつては困ります。

童子　食べ物が得られないから云へないと申されますが、何故言へないのですか。腹が空いてゐて言はれないのですか。何か私に要求するものがあるから、言へないと申されるのですか。

もし私の爲に後の半偈を說いて下さいますれば、私は終身あなたの弟子となりませう。羅刹大士の說かせられた偈文は、その名字もその義理も、とても言葉では表現されませぬ無盡の味があります。どうした譯で說くことを厭はれるのですか。財寶の布施は竭盡ることはあるけれども、法施は限りなくして盡きないばかりでなく、施すほど、その德が豐かに增されてゆくといふではありませぬか。私にいま、後の半偈の法を敎へて下さいますれば、私の心は、あの前半偈を聽いた時よりも一層勝れた驚喜を起すことでせう。この半偈さへ說いて下さいますれば

終身あなたの弟子となつて仕へませう。

羅刹　童子。あなたの智識は甚だ豊かで、多過ぎる位でせう。然したゞ自身のことのみを憂へ、自身のみを愛してゐる。私が飢渇に逼られ、苦悩に悩まされてゐて、到底説くことの出來ないことを少しも考へてはくれない。

童子　飢ゑてゐる、飢えてゐると申されるが、あなたの食べ物は一體何なのですか?。

羅刹　童子。あなたが問うてくれても駄目だ。私がほんとうの食べ物を乞うたらば人は皆怖れて傍にゐないでせう。

童子　こゝには私一人のみで、外には誰もゐない。重ねて申しますが、私は怖れはしませぬ。何故説いて下さらないのですか。

羅刹　さう申されるのならば、云つて見ませう。驚いてはなりませぬ。私の食べ物は血のしたゝる人の煖肉です。私の飲みものは、人の熱い血潮です。私は薄福な者であつて、さうしたものばかりを食べものとしてゐます。周ねく手のとゞく限り索ね求めたけれども得られなかつたのです。世の中には人の數は無限にあるけれども、皆豊かな恵まれた福德を具へてゐる。のみならず、圓滿な福德で莊嚴られてゐるから、諸天善神が守護、愛念して止まないのです。私は到底これ等の力に打ち勝つて、彼等を殺すことは出來ない。

童子　あなたがもし、後の半偈を、完全に敎へて下さいますれば、その偈文を聞き已りまして、私のこの身體を貴方に供養いたしませう。羅刹大士、もし私が尊いその法を聞かないで、このまゝ生き長らへてゐても、それは一向つまらない事です。むだなことです。たゞ山中の、虎狼鵰鷲等の鳥獸の噉ふ食べ物となるばかりでせう。生きてゐても毫末の福德も積めませぬ。然るに今半偈を聞かせてさへ下されば、阿褥多羅三藐三菩提を得て、この壞れ易い不堅身を捨て、永へに壞れることのない堅固な身が得られることでせう。だから私は身を捨てゝ法を聽くこ

とを少しも惜しみはいたしませぬ。

羅刹　どうして童子のさやうな言葉が信じられませう。たゞ八文字を聽くのみで愛しい自身の身を捨てるなどと云ふことは、考へられないことではありませぬか。

童子　あなたにも似ないことを申されます。そんな道理のわからないことを申して下さいますな。つまらない石や瓦を捨てゝ、七寶瓔珞を得ることならば、誰でも雙手を擧げて賛成することでせう。このくづれ易い不堅身を捨てゝ、金剛不壞の身を得ることならば、誰でもいたしませう。あなたの申されることこそ道理に契はないことです。私の申すことは證を立てることが出來ます。大梵天王も、釋提桓因も四天大王も證據となつてくれませう。また天眼をもつてゐる諸菩薩達、衆生を利益しようとして、大乘敎を學習してゐる方々、六度萬行を具足してゐる菩薩方も證明の勞を惜しまれる筈はありませぬ。また十方三世の諸佛世尊方も、私がこの八字で身を羅刹大士に捧げることを嘉して下さいませう。どうか、後の

半偈を敎へて下さい。

羅刹　あなたが、そんなに專念に求められるなら、敎へませう。諦に聽いて下さい。あやまりなく諦聽いて下さい。今から半偈を說いてあげませう。

（童子は大に歡喜して、己が身に纏うてゐた、鹿皮の衣を脱いで、敷いて羅刹の法座を作る）

童子　大士。どうぞこの座に上つて下さい。そのまゝでは、もつたいなう御座います。

（童子叉手して長跪合掌の禮をとる。しばらくして）

どうぞ、では今から半偈を說いて下さいまし。

羅刹　（音吐朗々として）生滅滅已寂滅爲樂（常なき法の滅びしところ、ろしづかなる樂なれ）

（普通の聲に返つて）さあ菩薩摩訶薩。あなたは、あなたの本願である、偈頌を具足に諦聽しました。あなたの願樂は滿足された筈です。では、御約束通りに、私や衆生の爲に、あなたの身を私の口に與へ施して下さい。

童子　今に及んでかう云ふことを願ふのは、如何にも心苦しいことですが、暫く待つて下さい。今、そこここに、この偈文を書きつけておきませう。これも、私の本願を成就することだから救して下さい。（童子、石や壁、樹、道等至る處に偈文を書きつけつゝ）かうしておけば、私のみでなく、この偈文の爲に救はれるものが澤山ある筈だ。餘り待つてゐてもらふのも心がひける。ではこの位にしておいて。（身に纏うてゐた衣服を着なほしてしまふ。死後身體の露現するを恐れてゞある。かくして近くにある最も高い樹の上に攀ぢ上る）。

樹神　（童子に）　あなたはそんなところに攀ぢ上つて何をしようとするのですか。

童子　約束をはたして身を捨てるのです。偈頌を敎へて貰つた價を拂ふのです。

樹神　あのやうな十六字位の偈頌が何のたしになるのですか。

童子　私はこの十六字に從つて心が啓けたのです。悟を開いたのです。この十六字こそは、十方三世の諸佛菩薩の眞實空法の道を敎へる文字です。私はこの爲に

は身命財を捨てる位は何とも思うてはゐませぬ。財寶がほしいからでもない。天上に生れて、轉輪聖王や、四天大王、釋提桓因、大梵天王となつて、人天の樂しみを極め盡さうと云ふのでもない。たゞこの十六文字の功德に殉ずるのです。願はくば、一切の慳惜の人々は、悉く來つて、私のこの身を捨てるのを見聞するがよい。また少し施してすら貢高の心を懷く輩も來つて、一偈の爲に、身命を捨てること、名もなき草木を捨てるほどにも思つてゐない私を見聞するがいゝ。私は誇りの爲に云ふのではない。たゞ誡めともなれよと願ふばかりに言ふのである。

（羅刹、口より火を吐いて童子の降るを待つ）

（童子、樹下のその羅刹の火を吐く口に向つて身を投ぐ。紫雲たなびき、空中に清淨な音樂を聞き、種種の人天の驚倒する聲を聞く。羅刹は身を帝釋天に復して、童子の身を救ふ。諸天擧り來つて稽き頂禮して讃嘆す。讃嘆の聲暫しの間は鳴を靜めず）。

——（竟）——

盧至長者物語

——（若著慳貪、人天所レ賤是以智者應二當布施一）——

一

ある時、長者盧至と云ふ人がゐた。その家は富み榮えて、毘沙門樣のやうに澤山の財寶が、倉庫に盈ち溢れてゐた。これは往昔、勝れた福德である布施をした報ひである。

然しその布施をする時に、心底からの至誠がなかつたので、特殊な富貴な身分でありながら、心は賤しく、著るべき衣服は垢じみ、食べものは稗、若草、菜葉などいふ卑しい物や雜穀類のみを用ひてゐた。飢はかやうなもので滿してゐる。されば、その渴きを醫すには生水を用ひ、乘るべき車は朽車であり、冠るべき帽子は、草木の葉を編んで造ると云ふ有樣である。畢竟、心が慳悋であつたのであ

る。自分には身心を勞し苦惱を嘗めてゐながら、衆人からは嗤笑されてゐるといふ憐むべき境遇でした。悲しい淋しい境遇で、また傷ましい皮肉である。ある時佛子羅睺羅が申したことがあります。「布施の因は大小濃淡種々あるから、その受果も違つてくる。信施の志が濃かに行き渡ると、その報として、心意が自在無碍となる。若しまた、たゞ施し手は徒らに施すのみであつて、施物にも、施を受くる人々にも慇懃、尊重の念を懷かない時には、勝れた淨い報は得られる筈がない。盧至長者は巨滿の富を擁してゐるけれども、人に輕賤せらるゝ所以は、布施の因に缺けたところがあるからである」と。實際さうに違ひありますまい。

二

節會が來て、盧至長者の住ふ城中は歡樂に醉ふことゝなつた。城中の人々の內には、自が邸宅を莊嚴し、或は嚴めしく飾り、或は彩繪を施すといふ風でありま

す。或は繒幡蓋を懸けたり、瑠璃で裝飾するものもあります。人々は競つて華で飾つた冠を懸け、香水を地に灑ぎ、花束で牖牖を嚴り、美服を纏ひ、美味に飽きました。家々の飾られた窓からは、伎樂の調、樂の音がゆかしく、あるひは、騷騷しくすら響いてくるのでした。かく華かに、にぎ〳〵しい歡樂の巷、娯樂の日に、人々の歌ひ舞ふ樣子は、諸天宮にでも比すべきものでありました。盧至長者も、あまりの樂しさうな聲調にふら〳〵と出て見ると、この有樣である。奴婢、下賤の者すら、衣服を飾り、美食に飽いてゐる。然るに自分は素より、衣服、瓔珞、財寶は滿ち溢れてゐる。この長の年月の憂惱を霽すはこの時であると思つて彼長者は自ら鑰で庫藏を推し開いて、わづかに五錢のみを取出したのであつた。それ以上の財は出すに忍びなかつたのでありませう。かく慳貪邪見でありますから、もし家に歸るとすれば、妻子等の一家眷屬に與へなくてはならないし、他人の處に行くとしても、主人等に要求される懼れがあると考へて、二錢で麥粉を買

ひ、又の二錢で酒を購ひ、殘りの一錢で葱を買ひ入れて、我家からは、人に知られないやうに衣に裹んで鹽を持ち出して、城外の樹下に行くのであつた。しかし樹の下であるから梢には澤山の鳥がゐて大きな聲で鳴き、食物を奪ひ撮らうとするので、塚墓の間に逃げるのであつた。ところが、此處にも屍を獵る狗がゐるので、靜かなだれも何もゐないところを索ねるのであつた。漸くにして、靜かな處を見出して一人でゐることが出來たので、幸よしと喜んで、酒に鹽を、麥粉に葱を混ぜて飲み食ひするのであつた。まだあまり飲んだとは云へないのに、心の勞作と、充ち足りとからであらう、大きに醉うてしまつた。醉うたものゝ常として大言莊語し、一つことをくど〳〵と語り、亂舞歌唱すらするのであつた。

「國中のものは擧つて歡樂に醉つてゐる。私だとて歡樂をほしいまゝにせずにゐられようか」と思つて、起つて舞ひ、聲を擧げて歌ふのである。

「帝釋天すら今日の歡樂は私に及ぶまい。まして毘沙門天などは及びさうな筈は

ない」と。

釋提桓因（しやくだいくわんいん）は、てうど自が眷屬なる無數の天衆を伴つて、祇園精舍（ぎをんしやうじや）なる釋尊の許に詣でようとして、道邊でこの盧至長者を見、長者の「帝釋天に勝る」と云ふ歌を聞いて、いさゝかむつとするのであつた。その胸のもだ〳〵をおさへてやゝ暫らく默想して後、堅く決心するのであつた。

「この慳貪な奴！獨りで塚間に酒を飲んでゐやがつて、それでゐて、わしを罵り辱しめてゐる。わしは佛樣のところへ行くつもりで出て來たが、ひとつ此奴を惱ましめてからにしよう」と。

三

帝釋天はその決心を果さうとするのであつた。

さて決心してしまふと、帝釋天はすぐ盧至長者そのまゝに身を變じて、長者の

家に行くのであつた。盧至長者の通りな相（すがた）なので誰も疑つて見るものすらない。

そこで帝釋天は、長者の父母や妻、婢、眷屬を集めて言ふのである。

「私は今まで恥しいすまないことをしてゐました。しかしわたしは只今から心を改めます。いままでは多くの財寶を持ちながら皆樣に不自由な目をさせて來ました。ほんとにすまないことでした。それはわたしに慳鬼（おに）がついてゐたのです。それがために身には弊衣を纏ひ、粗食を取り、父母、眷屬、妻妾をも碌に養はずにゐたのです。今日道で一人の道人に逢つて、神呪（まじない）を授つて、長らく惱まされてゐたその慳鬼を、追ひしりぞけてしまひました。もう大丈夫です。設（たと）ひ重ねて來ても、もうわたくしを惱ましゝ亂すことは出來ますまい。然しあの慳貪な鬼奴は、その相好容姿（すがたかたち）がわたしによく似てゐます。もし來たら門番に言ひつけておいて、棒でうちのめすやうにして下さい。彼奴はきつと詐つてわたしこそ盧至であると云ふに違ひありません。皆樣は、それを信じてはなりませぬ」と云つて、長者のす

べての寶藏を開いて、瓔珞や微妙なる衣服、諸財寶を、母や妻や多くの家人に與へて、暖衣飽食せしめるのであつた。また伎樂をも調へなどして歡樂歌舞をすらさせたので、長者の家は昨日までとは、天地宵壤の差が生じたのであつた。眷屬一家も、身を清め心をすが〳〵しくする爲に、香を塗り沈水香木をすらたくのであつた。

帝釋天は、母や妻と共に手を携へて歡樂嬉戯、舞ひ樂しむことは言葉にたえるほどでした。

舍衞城内の人々も、今迄の盧至長者を知つてゐるから、盧至の變つたことを聞き傳へて、大概の者は驚き、疑ひ深い者は來つて眞相を確めるものすらあつた。

釋提桓因はまた門番に申しつけて「もし慳鬼が來たら、門番自身の施與されたる瓔珞、財寶、妙衣、伎樂を身につけてから、門を開くがよい」と申し渡すのであつた。かくて人みな、おどろきかつ喜ぶのであつた。

四

處が一方盧至長者は、名殘なく醉醒めて、舍衞城に入り、獨り淋しく、今日一日の事を回顧しながら自が家に歸りつくのであつた。ところが群集が門戸に滿ちて立ち騒いでゐる。その間からは歌舞の聲音さへ聞えてくる。驚きあやしんでかく思惟するのであつた。人は自分の勝手な風にしか考へないものであり、盧至のやうな人は、本來疑ひ深い者である。

盧至「これは王樣が、私の富を嫉み瞋つて、群臣諸兵を將ゐて我家を誅しようとしたのであらう。だから舍衞城の人々は喜んで節會をなすのにちがひない。處が私は何も惡い筈がないので、諸人は私を讃嘆する爲に來つて歌舞伎樂をするのであらう。處が、奴婢共は又困つたものである。このどさくさまぎれの機會に乘じて庫藏を破つて噉食、飽衣しようとしてゐるにちがひない」と、反省の足りない彼

としては、當然の思惟をなして、疾走して門に至つて大きいかつ高い聲音で、家人に叫ぶのであつた。けれども家人は音樂は鋭く奏でられ、自が身は亂醉亂舞してゐるので、一人として盧至の喚び聲を感ずるものはなかつた。

しかし帝釋は天神であるから、盧至の歸り來つたことを知つて、皆に告げて、「誰か門を打つて、叫び喚んでゐる。暫らく音樂を止めてみよ。もしかすると慳鬼が來たのかも知れない」と云つたので、氣味わるく恐ろしく思つてゐる彼等は裏門を推し開いて、逃げ避けるのであつた。

五

盧至長者は開門せられたので走つて屋内に進んで見ると、自分と同じ姿の男が眷屬に圍繞されて正座についてゐる。その左右に母と妻が侍つてゐる。皆常に變つた莊嚴な寶服、七寶を鏤めた瓔珞をつけて、酒肴を調へて樂しさうな宴を張つ

てゐる。皆の顏容は熙怡として慶ばしさに輝き、彼等の羅列する相は燦爛と光る星の如くまばゆいのである。

盧至は夢ではないかと疑ひながら、帝釋なる長者に詰問するのである。

盧至「貴樣は何んだ。わしの家に來て擅に放逸をなし、衆人を誑かしたりすると云ふことがあるか」と　ところが長者は、悠容迫らず微笑を浮べて、

帝釋「わたしはこの慳鬼の爲に年來慳悋の奴隷になつてゐたのです。今日は皆がわたしのよい男となつたのを喜んで歡樂娯戯してゐるのである。お前のやうなものは（と盧至に向つて）もう歸る方が得であらう」と。この時家人眷屬は眞實の盧至に向つて尋ねるのである。

眷屬「あなたはどなたですか」

盧至「俺は盧至ではないか」と言ふと、一家のものは、帝釋を指して「この方こそ盧至長者であり、私達の主人です」。

盧至の心は平でない。重ねて彼等家人の眞意を確めるのである。

盧至「皆は、俺を本當に誰だと思つてゐるのか」

家人「あなたは盧至長者に似てゐるが、鬼なのでせう」と取合はないので、盧至長者はいよ〳〵やつ氣となる。

盧至「俺が鬼であるものか。俺こそ本當の盧至ではないか、とくと見てくれ」と氣もそゞろである。

窮した盧至は、自分を生んだ母に向ふのであつた。

盧至「お母さん。あなたは本當のことを知つてゐられるでせう。お母さんは私を生んで下すつた方ですから」と云つて、母の顏容をじつと見つめてゐたが、母は彼の盧至でないことを信じてゐることをはつきりとその顏に示してゐる。かくて盧至はとりつく島がない。されば妻や家人にかき口説くのである。

盧至「妻よ、おまへは晝夜共に傍にゐたのだから信じてくれるであらう。わたしはそなたを敬愛してゐたのだから。家人達皆のもの。汝達も俺をわからないと云ふことはないではないか。その男は（と帝釋を指して）わしに似てゐるがどこか違つてゐる。たゞわしを化作してゐるのである。俺は少さい時から產業にいそしんで財產を積み、庫藏を造つた。その財寶をどうして湯水のやうに費はれよう。俺こそ盧至である」と云ふが、母や妻を初め家人に至るまで、今は帝釋の心盡しに醉うてゐるので、一人として盧至を信ずるものはない。

帝釋は、尙も盧至及び盧至一家のものを飜弄するのである。心の中ではその面白さと、いたづらをする心苦しさとが戰つてゐたことであらう。

帝釋「あの男と（と盧至をあごでしやくつて）わたしとは、大變よく似てゐる。どうしてあなたは、私が盧至であると信ぜられましたか」と母に尋ねるのであつた。

母「あの鬼とあなたの相かたちはよく似てゐますが、あなたは妾に孝順であり、妾によく仕へてくれる。だから眞實の生みの子であることが知られます。あの男

は鬼に違ひありませぬ。もしこの二人が、總て妾に孝順であるのならば、どちらが、生みの子であるか知れないでせう」と、女らしい本能的な主我的なことを云ふと同時に、賢母らしさを發揮して、嫁に向つて言ふのであつた。

母「この人が、夫だから傍に倚つて……」とあとは目に物を言はする。妻も、いままでの夫とは、樣子が變つてゐるので、羞赧(はぢらひ)をもつのである。それでも、夫の傍によりそうて小さい聲で女らしく言ふのである。

妻「あのいやな憎らしい人は早く出て行けばいゝのに。私はあんな男の傍へ行くのならば死んでしまひたい。あなたの傍にゐてこそ生きてゐたいのです。あなたの傍にゐるのみで救はれます」。

帝釋天は飜弄が面白いので圖に乘つたのであらう。尙も盧至をいじめて家人達に言ふのであつた。

帝釋「家人達よ。汝等は眞實に私を盧至長者だと思うたならば、なぜ、あの鬼をこ

の家の中に入れておいて平氣でゐられるのか」と家人達を皮肉にやつゝける。家人達はこれを眞面目に受取つたので、盧至をうち倒し、手足を持つて盧至を曳いて門外に出し、街巷(まち)に至つて、棒等で打ちのめすのであつた。

盧至は身も世もあらず、恨み泣き、身悶えするのであつた。嘆き悲しむこと切である時ほど、世の暗く、味氣ないことはない。盧至は考へるのであつた、「俺の身體、相貌は變つてはゐない。何故に皆は、かくも俺を見棄てたのであらう。何故に俺の位置、榮譽はかく違つて來たのであらう」と、ひたすらに、世の人、皆のものゝ自分を遇することの冷酷なのに對する不滿に、骨をも嚙まれるやうに思ふのであつた。かく悶え、嘆き苦しみ、悲しむ時、深い反省が行はれて、終には眞實の世界に更生することが出來るのである。

眞實の世界は必ず開けるものである。眞實の世界が開けずに終ると云ふことがあるならば、世は餘りに不合理であり、淋しすぎる。

六

盧至長者が、街巷中で悲歎にくれて顛狂のやうになつてゐると、近親や家のものでない者が通りかゝつて、盧至なることを信じて、盧至をいたはり慰め、意を確にもつことをすゝめるのであつた。一度激しい悲苦を味はゝしめられたものは人を素直に信じ得なくなるものである。盧至もその人達を信ぜずに、彼等の眞意を疑うてゐるのであつたが、彼等が眞實に自分に愛をもち、自分をいたはつてくれることを確めると、又、さめざめと泣き出して、帝釋や家の者等の委曲をくどくどと訴へるのであつた。

委曲を聽いてゐた彼等は、帝釋を誰であるかは知らないので、正義感に燃えて怒り出すのであつた。種々議するがうまい考も生れない。する中に、一人が王に訴へることを申出で、皆がこれに賛成することゝなつた。かくて盧至は明日共に

王の所に行つて訴へてもらふことをも約したが、尙困つたことには、今盧至は、少しも、何物も持つてゐないので、王に奉る贈物すらない。で、止むなく自分の苦しい胸の中を訴へて、財産をとりもどしたならば、その時、返濟することゝして、それ等の人々から二張の毛氈と四銖金とを借り受けた。皆は、盧至長者が已前と變つて大腹となり、大きい贈物をすることを大聲を出して笑ふのであつた。

こゝに至つて、盧至の心はかなり安らぎ、明るい心に返つた。然し明日の王との面謁を思ふと不安でないでもない。長くこの城下に住つてゐても、まだ曾つて一度も面謁もせず、貢獻物を差上げたことすらないのである。

その翌朝の盧至の心は、光明を望んでゐるのでいそ〳〵してゐる。また結果を考慮に入れると焦々せずにゐられない。とにかくじつとしてゐられないのである。

二張氈と金四銖金をもつて皆の人々に送られ、王の所に至つて、守門の者に貢獻物をもつて來たことを申上げさせるのであつた。王は驚いた。そして顧みて笑

はずにはゐられなかつた。「もう私が王位に卽いてから三十年にもなる。その間盧至は慳吝であつて、一度もその財物を獻上したことはない。今日上ると云うても僅少なものであらう。深くかつ審に考へて見るに、盧至は必ず來たのではあるまい。節會で諸人が來るので、お前達守門の者を調戲ふのであらう、盧至が來るなどゝ云ふことは信じられないのではないか。調戲ふなどゝ云ふことはしてはならないぞ。然し王者たるものは、大海の細流に逆はないやうなものである。獻上物の多少を云爲すべきものではない。たゞその心根を買つてやらなければならない。眞實に來てゐるのならば、面謁を許すがよい」と云はれる程、王の心の上には盧至の來謁が信ぜられないのである。かくも盧至の慳貪な稟性は宿業深く生みつけられてゐたのである。

門番に導かれて、王の所に到つた盧至は、早速二張の毛氈を王に奉らうとして手で毛氈を挽いて見るが、腋に挾まつて出てこない。力を盡して挽くと出でたが

二張の毛氈は二束の草となつてゐた。帝釋天がかくしたのである。

盧至は深く慙愧して地に跪くのであつた。王はこれを見て慈愍を起して「草束であつても恥づることはない。たゞ誠意を受けるであらう」と申されるので、盧至は尙ほ慙愧しかつ憂ひ悲しみ、獻欷するのである。そして涙ながらに云ふ。

盧至「羞慙しくてしかたがありませぬ。穴にも入りたうございます。この身のかき消えることが祈られます……」と云ふが泣きながらであるから言葉が通じない。

かくて王は哀愍して伴なひ來れる人々に事の本來始終を聞かれるのであつた。伴なひ來たれる諸人は、更る代る事の始終を告げて、盧至の悲苦、憂悶を訴へ、二氈の二つの草束となつたことを物語るので、王の悲憐の心は增して行くのであつた。

王「世の人は相貌が似てゐても意が變つてゐる。心が似てゐるものは相貌が異つてゐる。また隱れた處や諸秘密は必ず知る筈がない。きつと少しは違つてゐる。

愁憂する必要はない。私が今細やかに檢べてやらう」とさへ云はれるのであつた。

その時傍にゐた一名臣宿舊は、大王を合掌し讃嘆して申上げるのである。

宿舊「王樣の智慧と慈愍は深い。憂苦悲惱するものは王樣の力で救濟される。貧窮なる者、困厄する者は、その親友のやうに救助される。王樣は、又、修善の者の爲には法の朋となられる」。

盧至は王の悲智に喜び勇み、地に跪いて、

盧至「私の家には王樣の仰のやうに極く秘密のこと、隱した財寶があります。また隱密事もございます。きつと彼奴は知りませぬ。願くば大王、わたしの爲に檢べて下さいまし」と請願するのである。

王はすぐ使をして帝釋の盧至を喚ばしめた。王は、形容、相貌を諦觀、熟視するに。餘りによく似てゐるのに、曾つは驚き曾つは疑ひ困られるのであつた。年の頃も聲音までも違つてゐない。王はかくては前言を取消したくすら思はれるの

であつた。また徒らに粗末な贈物を受けて訴訟を裁き得ないことを慙愧するのであつた。

けれども眞實の盧至は裁を御願ひする。王はいよ〳〵困るのである。二人は鏡中の像の如く瓜二つである。王が裁き得ないことを慙らひながら云ふと、眞實の盧至は云ふのである。

盧至「私が眞實の盧至です。であるからこそ、私が先に王樣に訴へたのでございます。それでなくてどうして訴へられませう」。

王はもつともと思うたが、然し深く考へて見れば、眞僞はいづれにもつけられる。疑へばいくらも疑へるので、もつと確實な證據を得なくてはならない。かくて王は帝釋の盧至に尋ねるのである。

王「盧至よ。あなたは慳貪であると聽いてゐたが、何日からどうして惠み施すことを好喜するやうになつたのか」。

帝釋も拔かりはない。

帝釋「私は佛の敎を承りましたことがございます。人が慳悋であると、後世餓鬼に墮して、百千萬歲飢餓の苦惱を受け、見るからに心をすが〳〵しくする澄淨な冷つこそうな泉や小川の流れを見て、掬はんとすると燃えたつ焰に變つてしまふ。膿血、尿屎の如な不淨物を求めてさへ、毛すじほども得ることが出來ない。かう承りましたので、慳悋なる罪咎の畏ろしさに戰いて、心を改め、布施を好むやうになりました」と答へるのであつた。王は又この道理ある言葉を聞いて「さうだ垢ある着物も洗濯すると淸くなる。煩惱に汚れた心も法を聞いて淸淨になるのは當然である」と考へて、盧至を又、いづれとも判定し難くなつてしまふのであつた。諸臣にも計つて見るが妙案もない。たゞ先に王樣の申された隱秘な事を細かく尋ねて見るより仕方がなくなつて來たので、賢臣の宿舊がそれを申上げるのであつた。王樣も事が面白く運ばないのでうろたへてゐたのであるが、宿舊の言上

を聞いて、また活路を開くことが出來たのを喜ぶのであつた。然し隱密な事を告げしめるには、猥はしいことも多いので、親族家人の年紀、舍宅、一切財寶、大小巨細の事々を皆書いて出させることとした。けれども一方は帝釋天であるから兩方共に少しも違つてゐない。かくて王は、今は自が神慮を盡して、いろ〳〵と籌量して見たが、私の力ではどうすることも出來ないと匙を投げ出し、これは人事ではない。人のしてゐる事ではあるまいと思ふのであつた。然し尙も試し見ようとして、自が身邊近く二人を喚んで、久しい間しげ〳〵と二人を見比べるのであるが、一向いづれとも判定し難い。かくいろ〳〵と計つてみてもわからないので、今は王樣は最後の手段として、近親の者、母と妻を喚んで驗べさせて見るがやはり一向判明しないことは、さきの酒宴の席のやうであつた。たゞ彼等は、自分によくしてくれるものが眞實の子であり、眞實の夫であると思つてゐるばかりであつて、いづれもはつきりした考があるのでないことがわかるので、王はいよ

いよ暗雲に包まれてしまふのである。で、又熟慮の結果、母親から小兒の時、身體の隱れた處に瘡、瘢、黑子の有無を尋ねて試すことゝするのであつたが、帝釋はこれも內密に母親から聽いて、同じやうに腋下に小豆ほどの瘢を化作して、二人共に少しも違つてゐない。かくて王や群臣は互に顏を見合せて、驚き大笑するばかりである。

終に王は、眞實に自が力では、いづれとも判定し難いことを證つて、祇園精舍に在ます釋尊の處に行つて、決定的な裁決を請ふことゝするのであつた。

七

「釋尊は、輝く太陽の如く一切衆生の諸惡、愛欲を解脫せしめ、乾竭しめ給ふ。その光顏は滿月の如く澄淨であつて、神通自在に三界の迷へる者を愛護、敎養して下さる。佛の大悲愍は、必ず私達の疑ひの網を斷除して下さるに違ひない」。

波斯匿王はかく思念したので、玉駕を、大聖釋尊の祇園精舍に枉げることを群臣に命じた。

群臣は、各自に天冠を嚴めしく飾り、瓔珞を鏤めた勝れた麗はしい寶服を纏うて、香華を執持して王に隨ふ用意をした。また二人の盧至長者を二匹の象に乘せて種々莊嚴し、嚴めしく飾つた。

王自らは、羽葆之車に乘つて、倡伎樂を作さしめ、王者の儀容を整へ、步武蕭肅と佛所に詣るのであつた。

爾時世尊は、天龍八部、四衆及諸弟子、諸菩薩等の大衆に圍繞されてゐ給うた。王と諸群臣は合掌作禮して後、申上ぐるのであつた。

王「私達は愚なる闇に覆はれ、百千の煩惱の爲に惱まされてゐます。佛意のみ淸淨であり、佛獨り寂靜の心を保ち、解脫を得てゐ給ふ。かくて一切の盲いたる我等衆生の親友となつて、我等の愚かな闇と百千の煩惱を除き滅して下さいまし。

私達はこの二人の盧至のいづれが眞實の盧至であるかわからないのです。どうか私達の疑ひの網を斷除して下さいまし」と懇請するのであつた。皆寂として音もない。

帝釋の盧至は莞爾として座に着いた。神色怡悅たるものがある。眞實の盧至は外は垢穢んだ衣を着てゐるとではあり、心はいままでの生活を反省して憂ひと惱みとを生じ、顏色も青ざめて、ことの不可思議な遷り變りに憔悴の色が明らかに見えるのであつた。心の中では、ひたすらに「佛は一切を悲憐し給ふと云ふから、私をも憐んで惡くはなさるまい」と思念しつゞけてゐた。帝釋の盧至はこの愁ひ惟悴する盧至を見て微笑むのであつた。

波斯匿王は、聖語を待ち兼ねて促すのである。

爾の時世尊は、相好よき臂、莊嚴された手を擧げて帝釋天に向つて、

「汝は何と云ふ戲事をするのであるか」と申されると、帝釋は聖語に隨つて、帝

釋の本相を顯はして、如意珠の如く光明朗らかな身を現じて、世尊を合掌して、

帝釋「盧至長者は慳貪の爲めに虜にされて、衣食すら滿足にせず、家族をも養はないでゐます。のみならず、節會の時には金五錢位で酒や麨粉を購うて、これらを飲食して大醉したばかりでなく、戲笑、歌舞して、輕々しく帝釋や諸天を罵つてゐたので、私は彼奴を苦しめ惱ましてやつたのです」。

八

佛は、懇に盧至の慳悋であつた過咎を說いて盧至を誡められた。盧至の心はかくて漸く改まることゝなるのであつたが、帝釋に對しては苦言を言はずにはゐられなかつた。「私が辛苦して集めたものをむだ〳〵と費つてしまふと云ふことは餘りではないですか」と。帝釋は答へた。

帝釋「私は汝の財物は少しも損じてはゐない。家に歸つて見るがよい」と云ふ。

佛は又この爭を見て、盧至と帝釋を共に誡めて、佛道に歸せしめ給うた。盧至長者は佛の敎誡に信順して須陀洹果を證するに至つた。

——(竟)——

本生物語抄

目次

倦まずして深く掘れかし……一
比丘よ、苦しまねばならぬ……一一
神はあらざるか……二八
神らしきと呼ばるゝはなにか……三六
海を越えて……五一
生命の貴さを知れ……五九
悪友……六二
毒果を食ひし人々のやうに……六七
及ばざること……七一
監視……七四
すべてをこのまざる……八〇
すなほならぬ女……八六
私は苦としない……九七
空中の民……一〇三
饒舌の龜……一〇八

倦まずして深く掘れかし

嘗て佛陀が舍衞城に在しましたとき、かの逝多林の御座につらなつた數多い聽衆の中に、一人の長者の息子がありました。その息子は、世尊の說法をきゝ、初めて肉體の痛ましき牢獄であることにめざめ、こゝに許されて、敎團の初位に入りました。その後の五ヶ年は、息子のためには滿位に入るための準備の生活であつたが、彼は、その終りに敎の道理をわきまへ、ひたすら神通の力を養つて居ました。をりしも、かれは世尊から默想の一題目を授けられました。それゆゑ、佛の膝下を去つて、ほど遠からぬ森の中に赴き、約三ヶ月の間、そこに瞑想をつゞけることになりました。てうどその頃は雨期であつたが、彼の神通は依然として進むことなく、內證の光は、さらに現れて來ませんでした。そのとき、彼の心に

浮んだものは、豫て世尊が衆生の機根に四種の別があると說かせられたことであります。彼は思ひました。「きつとこの私は、その下根のもので、とても證果を得られないものに違ひない。そんな私が、この森にいつまで居たつて何になるだらう。私はこの森をすてゝ世尊のもとに歸り、貴い誡のお言葉を聞かう」。そこで彼は逝多林へ歸つて來たのでありました。そのとき、彼の友人たちは彼の傍に來て、彼がどうして再び歸つて來たのかをきゝ初めました。

「友よ、私には道も證もほんとに惠まれてないのです。私には、自分の下根が見えすいてゐます。だから私はもう默想をつゞけることが出來なくなつて歸つて來たのです」。

これが彼の答でありました。比丘たちは、かく世尊の御敎を熱心にきいてゐたこの男の弱い心をとがめ、彼を世尊のもとにつれてゆきました。

「比丘たちよ、おまへたちは、なぜ彼をこゝへつれて來ようとするのです。彼

が一體どうしましたか」。

「世尊よ、このものは嚴肅な世尊のみ敎をうけた人間で御座います。それに、その行がつとまらないで、こゝに逃げ歸つたのであります」。そのとき世尊は、

「比丘よ、みんなのものはおまへの精進の行がつとまらぬとのべます。いつたいこれは眞實なことですか」と、問はれました。

「世尊よ、情ないことにそれは事實で御座います」。

「おゝ比丘よ、私の眼には、私の正法に耳をすませたあの謹嚴なおまへの姿があり〳〵と見えます。おまへの行手には、事實あらゆる精進の行が限りなく擴つてゐました。しかし、そこには輝かしい光明の世界が當然おまへをまつて居たはづです。なさけないことに、おまへはつひに中途で逃れて歸つたのですか。過去の强い心を、限りなくつゞく沙漠のなかで、旅に疲れきつた隊商の人々や牛の咽喉の渴きを生命の水を以てよみがへらしたあの强い强い心を、ほんとう

にどこでおまへはすてゝしまつたのです」。

かゝる世尊の言葉は比丘の胸に犇と響いた。この言葉をきいた他の比丘衆は、「世尊よ、すべてを知り給ふ世尊よ、この男がどうして砂漠のうちで人々を救つたのか御話し下さいませ。どうぞお願ひで御座います」と願ひました。

そこで、世尊はこの物語を比丘たちに告げさせ給うたのでありました。

かつての昔、伽尸國と波羅那斯國が梵摩達王によつて治められてゐた頃のことでありました。

菩薩は、この町のさる商人の家に生れました。菩薩は成長するとともに、父の業をついで、旅から旅へ商賣に出かけるやうになりました。いつも夥しい商品は五百の車に一つぱいに積みこまれるのでありました。それは、あるときのことでありました。菩薩が旅をつゞけてゐると、その前に涯のない砂漠が擴がつてゐま

した。その砂は、めづらしく美しい砂で、そのなめらかなことは、掌にいれて握りしめると、指と指との間から砂は自づと滑り落ちるほどでありました。しかしその砂が南國のはげしい太陽に照らされるとき、堪へられない毒氣があがつて、宛然、熱砂に化してしまふのです。で、もちろん、晝のさかりにその上を歩むことはできないのでした。そこで旅人たちは、あらかじめ薪や米や水や油其の他の日用品にことを缺かないやうに準備しておいて、そして熱の失せた夜になつてから、その砂漠を越すのでありました。曉方になると人々は車陣をつくり、日蔽を用意します。そして朝食がすむと終日その天幕の下に休むことにしてゐました。

やがて太陽が西の涯に沈むと、赫熱の荒原にも珍らしい涼味な風がそよつきます。軛をつけられた澤山な車は、かくして人々の夕餉の終るのをまつて、再び絡繹として其の沙漠を行くのでありました。その旅はまるで、舟人が大海原を越えるのと同じものでありました。海原を行くに水先案内が必要なやうに、砂漠をこ

すには沙漠案内者が是非ゐなければなりません。その案内者は、輝く星の光をめあてとしてその進路をきめてゆくのです。

このやうに、商人の菩薩も旅をつゞけてゐました。沙漠にさしかゝつてから、あまり遠く行かないうちに、菩薩は「今晩のうちに早くこの沙漠を通り越さねばならぬ」と思ひました。そこで菩薩は、なるべく旅の疲をすくなくするために、重い薪や水などをうちすてるやうに命じ、その出發を急ぎました。のび〳〵とつづいた一番前の車では、例の案内者が大空の星を見上げながら、しきりに指圖してゐるのでありました。しかし、長途の不眠のはげしい疲は、いつまでもこの案内者をそのまゝにしておきませんでした。案内者も車の上にぐつすり寝込んでゐました。その間に先頭の牛は、ぐるりと廻つて、もときた道の方へ、遠慮會釋もなくすた〳〵と終夜歩みつゞけてゐるのでした。案内者が眼を醒ましたときには驚いたことには、星の位置はまるきり違つた方角にありました。「車を廻はせ！

車を！」。案内者がびつくりしたこの叫びに、やうやく車の向がかはり終つた頃には、早くも夜は白々と明けわたるころでありました。

「こゝは昨日私たちの休んでゐたところである。もう薪も水もありはしない。いつたいどうしたらいゝだらう！」。

一隊の人たちは、もう根機も精も疲れはてゝ、ぶつ〳〵呟きながら、軛をはづし、車陣をつくり、天幕をはりました。やがて絶望のあまり、體を支へるだけの勇氣もなく、みんな車の下へくたばつてしまひました。このとき菩薩の面には強い決心の色が浮びました。「若し、俺までがかくなつたときには、みんなのものは、いつたいどうなるだらう！、そのときには、恐しい死が私達をとりまくのみだ！」。菩薩はまだ涼しい朝のうちにあちこちと歩いてゐたが、ふと青い茂みの側に來ました。「おゝ、こゝに草がある、きつと水があるにちがひない」。菩薩は力を得て若者に鍬をもち來たらせ、みんなで掘り初めました。

穴は、次第に深く掘り下げられて行つたが、一滴の水らしいものも出てきはしませんでした。カチリと音して鍬先にふれたのは、大きな岩がそこにあることを思はせました。ひと〳〵の元氣もこれまででした。みんながつかりしてしまひました。一縷の望がその音とともに消え失せてしまつたからです。しかし、菩薩の心は、まだ強くありました。彼は、穴の中に下りてその岩に耳をあてました。

菩薩の耳には靜かに湧く淙々たる水の音が、ほのかに傳つてくるのでした。

「若者よ、おんみは決して心をひるませてはならない。おんみの死はみんなの死だ、さあ、この大槌で岩をうち碎いて下さい」。

主人の言葉によびさまされた若者は、斷乎として穴を下りました。そして、鐵槌をふりあげました。若者の力は、いままでおほひかぶさつて水音さへさだかに聞えなかつた大きな岩を、眞二つにたゝき落しました。そこからは清冽な水のほとばしりが岩を破つたかのやうに噴き出しました。これこそ生命の水でありました

た。人々の死はかげをひそめ、すべての人たちには歡喜が溢れてきました。そこで一隊の人たちは日が沈むとともに、新しい元氣を恢復して、自分たちの掘つた井戸には旅人にわかるやうな印を立て、再び目的の旅をつゞけました。人々は目的地につゝがなくついて、よい利を占め、一生をたのしく暮すことができました。菩薩もまた慈悲行を施して、正しく報はれたのでありました。

かく物語を終り、すべてを知り盡し給へる世尊は、さらに次のやうな偈(げ)のべさせられました。

倦まずして深く砂道を掘る人々は
踏み固められた道のなかに水を見出す
倦まずして魂の靜寂を見出すまで

かく勇猛また精進ならしめよ。

この物語は、往昔、佛陀が舍衛城に在ましゝころ、その比丘たちに親しく物語られたものであります。世尊は、この物語をなし終られて四諦の理をお說きになりました。このときこの軟心の比丘は、初めて阿羅漢を得ました。

そして世尊は、現在の軟心比丘は、昔、生命の水を與へた忍耐强き若者であり佛に從ふものはそのころの隊商の人々であり、私自らはその頭の菩薩であつたとのべられました。

比丘よ、苦しまねばならぬ

あらゆる眞劍な精進を失つたかよわい一比丘は、世尊にたづねらるゝまゝに、まことに自分は墮落者であると、隱すところもなしにのべました。そのとき世尊は、しづかに口を開かれました。

「比丘よ、おまへはどうして信仰を持するに冷かでありますか。過去世に於て賢き人及び善なる人が、自己の王國を失つたときですら、最後は再び自分の手にその王國をとりもどし得たほど、その決心は强いものであつたのに」と云ひながら、かゝる過去世の物語をされました。

かつての昔、波羅那斯國の梵摩達多の御代、菩薩はふたゝび王妃の太子として

この世に生れられました。やがて命名式があつて、太子の名は善王子と定められました。善王子の教育は、十六歳のときまでに完全にすまされてしまひました。その後、王がなくなつたために、王子は名を善大王と呼ばれ、父王のあとを継承して、慈愛深く國の民を治めることになりました。かくて四つの各々の門には、施物が設けられました。そのほか街の眞中と王宮の城内と、すべて六ヶ處の施物所が置かれたのでした。そこでは、貧しい人たちや旅人たちに、施物が與へられるのでありました。善大王はよく戒律を守り、また齋日をおろそかにはしませんでした。こゝろは忍辱と、哀愍と、慈悲に溢れ、生きとし生けるものはことごとく、一子のやうに慈むといつた風でありました。

ところが王の家臣に、女官たちをひどくあつかふので、宮廷の評判者である一人の男がゐました。家來はそれを王の耳にいれたので、王は親しくそれを調べ、その評判の眞實なることを知りました。で王は、ただちにその家臣を呼び、その

命を傳へました。

「愚かなる行ひに、こゝろの盲ひたるおまへは、たゞちに妻と家財を携へてこの土地を去れ」。

これが王の命令でありました。

かくして、國に留ることのできなかつたその男は、やがて伽尸國を去つて拘薩羅國に仕へ、そこで重く用ひられ、王の顧問にまで出世しました。一日、その男は拘薩羅王に告げたのです。

「陛下よ、隣の波羅奈斯國は、蠅に邪魔されない蜜蜂の巣のやうに、寶物の裕かな王國であります。それにこの王は病弱でありますから、もし陛下がそれと御決心になれば、わづかな兵を遣つて征服するに、いさゝかの手間もかゝりません」。

こゝに於て拘薩羅王は、波羅奈斯國は大きく、そしてそれがわずかな力で征服

することができると云ふ注告とともに、さうした考をあやしいと思ひました。かう云ふ男は、自分を穽に落すやうに敎唆すると云ふ疑ひをふかめました。

「謀反者！きつと、たれかに云ひつかつたのだらう」。

「ほんとうです、私はたゞほんとうをお話しするのみであります。しいてお疑ひなら、家來のものを遣して、邊境の部落の虐殺を命じてご覽なさいませ。たとひ運惡く向ふの國の虜にせられても、きつと寶物までもたして、拘薩羅へ送り還してくるにきまつてゐますから」。

王は心のなかで「かれはなかなか强情に主張する、まあどうなるかやつてみよう」と思ひました。

そこで王は、たゞちに武臣どもを波羅奈斯國の國境にやつて、そこの人々を虐殺してくるやうに命じたのです。しかし、それらは直ちに虜へられて、波羅奈斯國の王の前にひきだされました。

「おゝわが子よ、なぜにおまへたちは私の部落の民を殺したのでありますか」。

「私たちの生きるためにです」虜らはこたへました。

「それならなぜおまへたちは、私のもとへ訴へてこないのです。ふたたびこんなことをしてはなりません」。これが王の言葉でありました。

そして王はいろ〳〵ものをあたへ、そのまゝ虜の繩を切りはなちました。人々は拘薩羅にかへり、そのすべてを自分たちの王のまへにのべました。しかしこのことだけでは、王は遠征に出かける氣になれないので、再び軍隊をむけて、他の部落に虐殺をこゝろみました。そこは殆んど王國の中心でありました。しかしこれらの人々も、ふたたび虜になつたのであつたが、また贈物をもつてかへされました。しかしこのことだけでは、まだ充分でないので、王はまた、三度目の軍を波羅奈斯の都會に、虐殺するやうにおくられました。そしてまた、前と同じやうに、贈物をもらつておくりかへされました。

かくてついに、波羅奈斯の王のほんとうに善人であることが明になりました。こゝに拘薩羅の王は、波羅奈斯の王國を圍むことに決心しました。そして多くの軍隊と軍象とをつれて、出發することになりました。

そのころ波羅奈斯國には、いかに荒れ狂ふ象軍の襲來をもひしぐ、一騎當千の勇士が千人ほどありました。この勇士だけは、帝釋天(たいしやくてん)と雖も恐れさすことができないのです。王命一下すれば、全印度をも蓆捲するに躊躇しないならびなき猛者(もさ)どもでありました。これらの勇士は、拘薩羅の王が波羅奈斯に攻めよせるしらせを聞くや、直ちに王にそれを傳へ、自分たちがすぐにも矛をとつて戰に派遣されるやうに願ひました。

「陛下よ、侵入者の一歩がこの地に動くまへに、すべてとりこにしてまゐります」と、勇士たちはいさみました。

「いや、わが子よ、私のために萬民のうち一人でも苦しむことがあつてはなりま

せん。もしかれらが私のからだを欲するなら、思ふまゝ王國を圍ませて、私のからだを虜にするが可いのです」。

王はかう云つて、侵入者に進みゆく、勇士の言葉をさえぎるのでありました。それのみか街の都門を一切開いておくやうに命じたのです。王は開かれたる都門に向ひ、綺羅星のやうに取卷く臣下の中の玉座に、靜かに身をよせてゐました。

拘薩羅王は街に入り、そして途に一人として刄向ふものもなく、やすゝと王宮に軍を進めました。扉と云ふ扉はみなあけはなたれ、莊嚴な宮殿には幾千の家來が偉大な王の玉座を圍繞してゐました。

ときに拘薩羅王は叫びました。

「みんなうしろ手にしつかり縛つてしまへ、そして墓地に追ひこんでおけ、手と足とを動かさないやうに、掘つた墓穴にいれておけ、墓におけば、夜になると豺がくるだらう」。

この惡王の恐ろしい命令に、家來どもは、波羅奈斯の王も家臣も、みな後ろ手に縛りあげ、やがて王宮にひきあげました。この暴逆な荒々しい敵の行ひにすら大善王のこゝろはきはめて靜かに落ちつき、怒りの念は少しも浮んできませんでした。かく家臣どもは、囚はれの身となつたけれども、王に逆ふものはそのうちに一人もありませんでした。それは王の家臣につね〳〵愛の訓がよくゆきとゞいてゐたからであります。

かく王と家臣は、車座になりて、墓地の穴にたゞ頸だけだし、生きながら埋められました。そして土を堅く踏みかためし、さうしてそこを去つてゆきました。憎みや怒から解放されてゐる大善王は、さらに家來に云ひました。

「わが子たちよ、こゝろを空しくもちなさい。そしてたゞ愛と慈みにこゝろを充しませう」。

と。眞夜中になつて、人肉の馳走にありつくやうに、豺の一群がやつてきました。豺たちの鋭敏な鼻は、遠くから肉の香をかぎわけることができました。しだいに獸の影が近づいてきました。そのとき王と家臣とは、思はず一齊に聲をはりあげて叫びました。びつくりした豺の一群は、にはかにくびすをかへして逃げ出し、そしてしばらくしてあとを振りかへつてみたとき、一人も追つてくる氣配も見えないので、豺の群はまた近づいてきました。ふたたび大きな叫び聲が豺の群を追ひやりました。豺の群はまへのやうに歸つてゆきました。しかし三度目にはたれも追つてくるもののないことをたしかめたので、豺の群は考へました。「これらは死ぬやうに運命づけられた人々だ」。豺群は大膽に逆襲してきました。聲をあげても、豺群は歸らなくなりました。豺の群はくるなり、めいめい餌を選びました。豺の頭らしきは王に、ほかのものは家臣にとりかゝりました。このとき工夫に富んだ王は、獸の近づいたとき、いかにも豺の食ふにまかすやうに、心持ち喉をあげました。そして豺の喉元に思いきり嚙みつきました。王の顎は深く豺の

喉に入り、豺はのがるゝことができずして、死を恐れ大きな唸聲をたてゝ荒れ廻りました。この苦悶の叫びを聞いた一群は、頭が人間につかまつたと考へたのでした。そして近づきもしないで、自分の住家にすべて逃げうせてしまひました。

王の齒から逃れんともがく豺は、狂氣のやうに荒れまわりました。そのたびに王を埋めてゐた堅い土が、動きはじめたのでした。王は自由に豺を動かして、その強い力によりて、自分の手足が自由になることをねがつてゐました。やがて王は、堀の縁に手をかけ身をずつとのばすと、からだを浮ばすことができました。そして家臣を非常によろこばせて、地上に助けるやうにはたらいて、ついに助けあげました。そしてその墓地から自由に立ちあがりました。

ところがその墓地のあたりに曝された一つの死骸が、二人の食人鬼によりて、それぞれ所有權が爭はれてゐました。そして食人鬼は、死骸の分割を口論してゐました。

「われ〳〵が、いくら諍つてみたところで分ることはできない。たゞ大善王は正しい方だ。王はきつと正しく分けてくれるだらう。やつてもらはうではないか」。

かう云ひながら食人鬼は、その足で死骸を王の前に運びました。

「王よ、私たちにこれを分配して下さい」。

「よろしい、私の友達よ、しかし私の身體はきたないから、浴するまでまつて下さい」。

かう王は云ひました。このとき二人の食人鬼は、簒奪者の用意した風呂の好い香のある水を、王にもつてきました。大王が浴してゐる間に、惡王の着るやうにおいてあつた着物をもつてきました。また王が着物を着てゐるうちに、食人鬼は四種の香のとり交ぜてある香箱を持つてきました。王が香をふりかけてゐるうちに、惡王が秘藏の扇面の上に置いてゐたいろいろな花束を、黄金の箱に入れても

つてきました。王はその花束で身のまわりを美しく飾りつけました。食人鬼は、私のできる仕へなら、どんなことでもしませうと願ひました。そこで王は、腹が空いてゐることを訴へました。さういつてゐるうちに、惡王の食膳を賑すやうに用意されてゐた、あらゆる珍味をもつて持つてきました。

大王はいまや身體を清め、身を飾り、ゆかしい香りにつゝまれ、美味に腹はふくれました。氣のきいた食人鬼は、王の食事がすむと、惡王の用意しておいた喉をうるほす香の好い水を、黄金の容器に入れ、また黄金の洋盃をそなへることを忘れませんでした。王が水を飲み、口を漱ぎ、手を洗ふと、食人鬼は口とりに香の高い蒟醤の實をすゝめました。そしてまだなんでも致しますと願ひました。

「おまへたちの不思議な神通で、惡王の枕元にある劒をもつてきてくれないか」

王はかう云ひました。やがて劒がもつてこられました。そこで王はその劒をとり、かの死骸をさしあげて、眞二つに切り落してめいめいに半分づゝ分けてやり

ました。王はこれを分けてやつたのち、劒を拭ひ、しづかにもとの鞘におさめました。

食人鬼は滿腹し喜びました。そして如何なることでもできるだけすることを王に願ひました。

「それでは私を神力でもつて、拘薩羅の王のところへつれていつて下さい。そして家臣どもをそれぞれの家にみんなかへして下さい」と王はたのみました。

「よろしう御座います」。

さうこたへた食人鬼は、王の願ひのとほりにしました。そのとき惡王は寢室の美しい床に眠つてゐました。それはほんたうに平和の眠りでありました。善王は劒の脊で惡王の腹の上をたゝきました。驚いて飛びあがつたとき、大善王が立つてゐるのを、燈火の輝きで惡王はみとめました。王は勇氣をひきたてゝ寢床から飛びあがつて云ひました。

「いまは眞夜中です。守衛は見張をしてゐます。扉は閉されてゐます。たれも入ることはできない。どうしてあなたは、手に劒をもち、華かな服裝で、こゝに忍びこみましたか」。

そのとき大善王は、自分の脱れた仔細をこまごま物語りました。惡王のこゝろは强くうたれました。

「おゝ大王よ、私は人間の性をめぐまれてゐるけれども、未だあなたのやうな善良をしりませぬ。たゞ肉を食ひ血をすゝる食人鬼の暴惡から、慈愛をしることができました。今後、王よ、私はあなたのもつてゐる德に對して、陰謀をしないでありませう」。

かう云ひながら、拘薩羅王は厚い友情を劒に誓ひ、大善王にひたすら今までのことを赦さるゝやうに乞ひました。そして大王に華かな床をすゝめ、自分はさゝやかな床につきました。

夜はあけそめ、太陽はのぼりました。惡王の命令である太鼓がすみ〳〵まで響きわたりました。人々は恰も天高くすみ滿月のやうに、大善王を讃嘆しました。そしてすべてが正しく、惡王はふたたび謝罪し、かつ王國をかへしました。そして云ひました。

「こののちは、謀反人があつたら私がしづめませう。王はたゞかれら自身を治めて下さい。私は命令を守る番人だと思つて下さい」。

さう云ひながら、拘薩羅王はさきの謀反人を處刑し、かれの率ゐた兵と象軍をひきあげて、自分の王國にかへりました。

かくて平和の世がきました。羚羊の足をもつた黃金の玉座の上には輝き渡る白い天蓋がかゝつてゐます。大善王は、かゝる光榮の世界を思ひ、またその思ひにしづみました。

「私の忍耐がなかつたなら、今日の光榮の樂みはなかつたであらう。またこの

數千の家臣どもは、生ける人數のなかに數へることもできなかつたであらう。私が一度失ひかゝつた王國をもどし、數千の生命を助けることのできたのは、たゞ忍耐によつてであつた。ほんとうに私たちは、忍耐の德の力がどんなに强く善きものであるかゞわかつたなら、倦むことなく努めねばならぬ」。感じ深い顏で、大王は云ひました。

友よ、努めよ、强くみたすべきは望み
こゝろしてそに疲るゝことなくば
人よ、見るべきは私、すべてなきは悲み
いまはわがこゝろのまゝにならぬなき希望の王。

かく菩薩は喜びにみちつゝ、まじめなる努力はいかに善きまた完全なる結果を

生むかを物語られました。正しく道を歩んだ王は、後世の幸福をもうけることができました。

この物語は、世尊が逝多林にゐませし頃、あらゆる眞劍な精進をすて去つた一比丘を、誡めるために物語られたものでありました。

世尊はこの物語を終へて、自聖諦をお說きなされました。このとき、この說法を聞いたかの墮落せる比丘は、阿羅漢果を證りました。そして世尊はこの物語に關して「提婆達多はその頃の惡王で、佛弟子は千人の家臣であり、そして私自身はその頃の大善王であつた」と仰せられました。

神はあらざるか

提婆達多が世尊を殺害しようと試みてゐることを聞かれた世尊は「比丘等よ、提婆が私を殺さうと企むことは、一度や二度ではないのです。彼はこれまで、幾回となくそれを企てました。しかし、いつも失敗してゐるのです」といつて、過去世の物語を遊ばされました。

波羅那斯國に君臨された、梵摩達多の御代のことでありました。菩薩は波羅那斯からほど遠くない、或る村に住む一家の息子として生れられました。

年頃になつた菩薩は、家族の人たちのすゝめによつて、波羅那斯國で家柄のよい家から若い美しい娘をもらつて結婚しました。

娘は色白の美しく愛くるしい處女でありました。その美しさは妖女神のやうでそしてその雅やかさは細糸の靜かにとけるがやうです。その媚娼な姿は人をして恍惚たらしめました。彼女の名はスヂアーターといひました。ほんとうに彼女はこゝろから忠實で貞操な女でした。夫や兩親に對するつとめをよくつくし、菩薩にとつても可愛い大切な愛人でありました。彼等夫婦は悅びに充ち、同じ心に堅く結ばれてゐたのでありました。

或る日、スヂアーターは夫に「妾はお父さんや、お母さんに會ひたくなりました」といつたのです。夫の菩薩は「よろしい、それでは早速ゆくことにしよう」と、急いで旅立ちの用意をし始めるのでした。色々と御馳走を料理し、その食事を馬車にもちこみました。夫の菩薩は前方に、妻は後方に乘つて、波羅那斯國をさして出發いたしました。夫婦は途中馬車を降りて歩んだり、また海水浴をしたり、食事をとりなどして愉快に道をすゝめるのでした。いよ〳〵波羅那斯國が近

くなつたので、菩薩は車に馬をつけ、自分は前方に乘りました。妻は着物を着かへ、美々しく着飾りて後方に乘りました。てうど彼等が波羅那斯國の町に入つたときでした。美しく飾つた象に乘り、莊嚴な儀式で、市中を巡行中である波羅那斯國の王に出遭つたのでありました。そしてまもなく彼等の前を御通過になりました。そのとき妻は、馬車からおりて車のあとをついて歩いてゐました。妻の姿が王の眼にとまりました。王はスヂアーターの美しさに目も眩むほど引きつけられました。

王は一人の從臣をよびました。そして「往つてあの婦人には夫があるか、どうかを尋ねて來い」と命じました。從臣はかへつて「婦人には夫があるのださうです。王樣にはあそこの馬車にゐる人を御覽になりましたでせう。あれが夫ださうです」と告げました。しかし王は、嵩なる想ひをどうすることも出來なくなりました。ついに、王の心には惡魔がみいりました。「あの女をきつと手に入れる方法

を見いださう。そして自分の妻にするのだ」と考へました。

王はまた一人の從臣をよんで「一寸來い。お前はこの王冠を持つて、そして町を通りがかつた風を裝うて、あの馬車の傍をとほるとき、この王冠をその中に投げこんで來い」と命じて王冠をあたへました。從臣は王冠を持つて立ちさりました。首尾よくその王冠を、馬車を通りすぎる風をして、投げ入れました。從者はかへつて、その都合よくできたことを王に告げました。

「王冠が失せた！出口を閉めよ、曲者を捕へよ」。

王は驚いたやうに、人々に命じました。市民どもは狼狽しました。さきの從臣は他の二三人のものと菩薩のところにゆき、「おい！馬車を止めろ、王冠がなくなつたのだ」と、自分が投げいれた王冠を自分で探すのでありました。

「曲者！」と、從臣は叫びました。そして菩薩を引捕へ、そして各自に打つたり蹴つたりするのでした。兩手をうしろにまはして縛りあげ、王の面前へひきずり

ゆき、大聲で「王冠を盗んだ賊をみつけました」と申しました。王はすぐと「首をはねよ」と命じました。そこで從臣どもは、菩薩を鞭で打檻し、町の隅々までも引ずり廻しました。

馬車を降りて後から歩いてゐた妻のスヂアーターは、兩手をさしのべ走りながら、泣いて叫びました。「おゝ、夫よ。あなたをかうした禍難にあはしたのは妾です！」と身もあられない程にもだえました。從臣どもは菩薩を背後からいだきしめ、懸命になつて首を切らうとしてゐるのでした。このありさまを見たスヂアーターは、彼女の善良なそして貞操な心から、いろ〳〵と想ひまどふのでした。「善良な人に對して、害惡を加へるあの殘忍なそして邪惡な人たちの行爲をとめるには、强大なこゝろがなければならぬ」と思ひました。そして、涙ながらに次の句を口ずさみました。

神はゐまさざるか、ゐますははるかの彼方にか
すべての世界を導く神はゐまさないのか
現在野蠻な猛惡の人たちが惡事をしてゐるのに
たれひとりとしてかれらをとゞめない。

この夫おもひの貞節な女の哀調は、神の王なる帝釋天（たいしやくてん）を、安坐せしめてはおきませんでした。「いつたいたれが神を下界に降らしめるのだらう」と、天は暫く思案してゐました。「きつとあの波羅那斯國の惡王がしでかしたことに相違ない。彼が貞節な女を悲慘な目に遭してゐるのだらう。すぐと降下せねばならない」。

そこで、帝釋天は梵天界からおり、象に乘つてゐる波羅那斯國の王をその脊より引きおろしました。そして帝釋天は神通をもつて、惡王と菩薩をとりかへ、菩薩は色々と美しい王の飾りで飾られ、王の象に乘せられたのでした。これに少し

も氣づかない從臣どもは、とう〳〵首をはねました。しかし、それは菩薩の首でなくて、惡王の首でありました。帝釋天はこのまぎれもない波羅那斯國の王の死體をとらへて、菩薩のところにやつてきました。そして、菩薩を波羅奈斯國の王位につけ、妻のスヂアーターを王妃にのぼせました。そこで澤山の從臣や、婆羅門や、人民どもは、帝釋天及び善王を見てよろこばしさうに云ひました。

「惡德の王は殺害されたのだ！。いまや正義の王樣を帝釋天の手から受けとつた」と。かくて帝釋天は天にのぼつて、宣言しました。

「汝等の正しき王は、これより正義をもつて統治するだらう。もしも王にして不正義ならば、王に洪水と枯渴とを送るだらう。また饑饉と殺戮と疫病の三大禍を見舞ふであらう」と。そしてまた、次のやうに口ずさみました。

梅雨に雨ふらさずして

ときならざるに雨降らす
王は天よりくだりきて
たゞ人の殺さるるをながめ立つ。

かく帝釋天は大群集に訓誡して昇天しました。そののち菩薩は、正義をもちて國を治め、ついに天生いたしました。

この物語は、世尊が竹林精舍にゐましころ、提婆達多がつね〳〵世尊を殺害せんと企てるのは、かうした過去世の因緣によつてゞあると云ふことについて、語られたのであります。この物語を終られて世尊は、「惡王は提婆達多であり、帝釋天は阿㝹樓多であり、妻の善王すなはちスヂアーターは羅睺羅の母であり、菩薩は私自身であつた」と仰せられました。

神らしきこ呼ばるゝはなにか

傳へいふところによると、舍衞城のある一人の長者が、愛する妻に先だたれたために、世尊の弟子の仲間に加はりました。長者は佛陀の敎團に入ることに思ひたつてからも、奇麗な住み心地のよい座敷、厨、倉などを建て、牛酪、米、そのほかいろ〳〵なものをもつて充してゐました。そればかりでなく、長者は既に世尊の弟子になつてからも、つねに召使のものたちを呼んでは、自分の好みのまゝの御馳走を調理させてゐました。それゆゑに、長者の欲望は極めて贅澤に、かつ十二分に充されてゐたわけです。たとへば、長者の着る着物は、晝と夜とは全くちがつたものでありました。また長者は佛弟子でありながら、僧院に足をふまないで、遠く離れた外廓にのみゐました。

或日のことでした。長者はその澤山な贅澤な衣類、寢具をとりだして自分の室中にならべ、土用干をやつてゐました。するとそこへ、たま〳〵托鉢に出てゐた一群のお弟子たちが通りあはせて、この有樣を見たのでした。

「それはいつたいたれのものですか？」。

と口をそろへて問ふのでありました。

「私のものであります」。

「この上衣も下衣も、この夜具もみんなあなたのものだと云はれますか？」。

「さうです、たれのものでもありません。すつかり私ので御座います」。

「あなたはなんと云ふ方でせう。世尊はかねて三衣だけをお許しなされたではありませんか。世尊はかく質素でゐられます。それにあなたは、世尊の御敎をお聞きになる方でありながら、思ふまゝの滿足を求めなさいます。さあ私どもについてお出でなさい。世尊の御前にゆきませう」。

かくて、弟子たちはこの男を拉して、世尊のもとへとやつてきました。

世尊はこれをみとめて申されました。

「比丘たちよ、なぜにおまへたちは、無理に一人の比丘をつれてくるのです?」。

「世尊よ、この比丘は、贅沢な眞似をする教團の違背者であります」。

「比丘よ、みんなの云つてゐることは眞實でありますか?」。

このとき世尊はかの長者に云はれました。

「さうであります」と、比丘たる長者は答へました。

「比丘よ、おまへはなぜにかくも身に多くのものを要せねばならないのです。おまへは私はいつも、少欲、知足、孤獨、決定心などの德を讃へてゐるのがわからないのですか?」。

このねんごろなる世尊の言葉も、長者には非常に腹立たしく響きました。そして、長者は直ちにさも怒にみちた聲で「ではかう致します」と、身に纏うてゐた

衣を、すつかり脱ぎ去つてたゞの肌着一枚になりました。この長者の怒れる姿を見られた世尊は、靜かに、

「比丘よ、おまへは過去に罪を犯すことを恐れ、その罪に浸ることをひとすぢに恥かしく思つてゐました。あなたが十二年間水魔であつたときさへ、なほその慚愧のこゝろを求むるに急でありました。しかるに、いまあなたは私の教旨に從ふことを誓つてゐます。それに憶面もなく衣を脱ぎすて、なんの慚愧も感ずることなくゐるのは、いつたいどうしたと云ふのです?」。

この言葉にうながされて、長者の心には再び慚愧のこゝろが蘇つてきました。長者は着物をとりて身に纏ひ、慕しく世尊に額づいてその傍に侍しました。比丘たちはその過去の物語を、語られるやうに願ひました。その物語はかう云ふのでした。

——かつての昔、梵摩達多王が、迦尸國の波羅奈斯を治められてゐるときのことでありました。菩薩は王姫の胎に宿り、王子としてこの世に生れました。そして、その名をマヒムサーサと呼ばれてゐました。王子が走りまわることができるほどに大きくなつて、父大王にまた一人の王子が生れました。その名を月王子と呼ばれました。ところが、この第二王子がやうやく一人立ちするころ、母たる王妃は、王子をのこして亡くなりました。

そこで二度目の王妃をもたれた大王は、その後も樂しく日を過してゐられたがやがてその后にまた王子が生れました。このことは、ことさらに王と王妃との愛をたかめたのでありました。その王子は日王子と呼ばれました。

大王は嬉しさのあまりその王妃に、王子のために望むことがあれば、どんなことでも聞いてやるから、おまへの望みがあらば云つてみるがいゝと約束されたのです。しかし王妃は、その望みをしばらくは、おくびにもださずに時節のくるの

を待つてゐました。

月日は流るゝやうにすぎて、王妃の胎に生れた王子は、ほどよく立派に生立つてゆきました。いまゝで默つてゐた王妃が、このとき王に云ひました。

「王よ、あなたは私の王子が生れたとき、かれがために望むものは何んでもかなへてやると約束して下さいました。どうぞ、王子を王位につけて下さい」。

「それはいけないよ、私には燃え盛る焔のやうに輝かしい二人の子供があるから。私はいまおまへの子供にこの王國を與へることはできませぬ」。

王の王妃の言葉に對してのこたへは、かう云ふ言葉でした。

しかし大王は、このとき王妃が王の拒絶を憤つて、わが子になにか惡い謀をするかを慮り、早速二人の王子を居間に呼びよせて云ひました。

「わが子たちよ、よく聞きなさい。あの日王が生れたとき、私は一つの誓をおまへたちの現在の母にたてたのです。それについて、いま日王の母は日王のた

めに、この王國を讓るやうに日王のために願つてゐます。しかし私は決してこれを與へようとは思はぬ。女はこゝろ黑いものです。だからお前たちにどんな惡いことをしでかすかわからぬ。いまのところ、おへまたちは此處を去つて、森のかなたへ赴くがいゝでせう。そして、私が死んだなら、歸つてこの家に屬してゐるこの町を治めるのです。わかりましたか?」。

かう云ひながら大王は、涙ながらに二人の王子に接吻して、こゝを去らしめました。かくて二人の王子は、父の大王に暇を告げ、住みなれた王宮を逃れてゆきました。しかしたれもこれを見たものはありませんでした。たゞこれを見たものは、宮廷に餘念なく遊び戯れてゐた日王子、かれだけでありました。

ものにさとい日王子は、かれらの出てゆく姿を認め、すぐその譯をさとることができました。そこで日王子も、かれらの仲間に加つて、同じく宮廷を去らうと決心しました。かくて三人は、その行をともにしました。

やがて三人の兄弟は、雪山の近くに來ました。そこに道を離れた大樹の下に坐してゐた菩薩が、日王子に云ひました。

「日王子よ、向ふの泉にゆき、その水で渴を癒し、身を洗つてくるがいゝです。その歸りに、私たちにその清淨な水を、蓮の葉に汲むで、持つてきて下さい」。

しかし、この池は、惡魔王ヴェッサヴァナが、一人のある水魔に次のやうに話しをしたのです。「もしこの泉へ水を飲みにくるもので『眞に神らしきものはないか?』と云ふ問をだして、それに答へることができないやうなものは、みんな喰ひ殺したらいゝ。しかしおまへは、水のなかに入らないものは喰ひ殺してはいかぬ」と云ふことでありました。で、この水魔は、くる人ごとにこの問をあびせかけました。そして答へられないすべての人は、みんな喰はれて仕舞ふのでありました。

そんなことを露知らぬ日王子は、だんゞこの泉のあるところへやつてきまし

た。彼は忽ち水魔に襲はれて、この問をあびせかけられました。

「それは知つてゐるよ、太陽と月だらう！」と王子は答へましたが、水魔は「おまへは知らない」と云ひながら、王子を水底深く、彼の魔窟に押し込めてしまひました。

こちらでは、待てども日王子が歸つて來ないので、心配でたへられません。で菩薩はこんど月王子をやりました。月王子もまた水魔の問に逢ひました。そして「眞に神らしきものはなにか？」と問はれ「それは天國の四つの場所だ」と答ふるや、「ではおまへも知らぬ」と、月王子もまたその犧牲となつて連れゆかれてしまつたのです。二度とも王子が歸つて來ないので、菩薩は、心はなはだ穩かでありませんでした。きつとどうかしたにちがひないと思ひました。

で、菩薩は泉の方へ、かれらの足跡をつけて下りてゆきました。そして、そこに水魔が出沒してゐると知つた菩薩は、忽ち劒をとり、弓を用意して身構へまし

た。かく菩薩が、とても泉に入る氣色を見せないのを覺つたとき、その水魔は急に樵夫の姿を裝うて、菩薩に話しかけました。

「あなたは、ほんとうに歩きつかれてゐるでせう。なぜあの清冷な美しい水に浴して、心地よい泉を飲み、蓮の花で飾らうとしないのです？、さうすればこの後の旅が樂に出來るわけですのに？」。

しかし、直ちに水魔が樵夫の姿をして出てきたと知つた菩薩は云ひました。

「おまへさんですね、私の兄弟二人を虜にしたのは？」。

「さうですよ」と水魔が云ひました。

「いつたいそれはどうしたわけです？」。

「なあに、この池に來たものは、みんな私のものです」。

「なんですと、みんな！」。

「さうです。『眞に神らしきものはなにか？』と云ふ問に答への出來ないやうな

ものは、みんなですよ。おまへさんはそれに答へることが出來ますか?」。

「できるとも、おまへの云ふことがそれにちがひなければ云ひますよ」。

「では聞かうか」。

「それでは話しますが、しかし私は長途の旅で疲れてゐるのです」。

そこで水魔は、菩薩に食ふべき食物と、飲むべき水とを與へ、またその身體を洗つてやりました。花をつけ、香をぬり、華かな居間の中央に寢臺を据ゑて、その上に坐らし、その足下に水魔は坐りました。そのとき菩薩は口を開きました。

惡を怖るるもの
善の靜かなる、清き魂の信者のみ
「神らし」とは呼ぶをうる。

この言葉を聞いた水魔は、大いに喜んで菩薩に云ひました。

「智惠ある者よ、私はおまへの今云つた言葉に動かされます。だから兄弟のうち、一人だけかへしてあげよう。どちらの方にしようか?」。

そのとき菩薩は「一番年の若いのを」と云ひました。

「智惠ある者よ、眞に神らしきものとの問に見事答へたあなたも、その智惠どほりには、身の行ひが出來ぬと見えますね」。

「どうしてさう云ふのです?」。

「その譯ですか、その譯はなぜあなたは年長けた方を注意しないで、若い方をゑらんだのです?」。

「水魔よ、私はそれについて智惠だけをもつてゐるのではありません。實際それを行ふことも心得てゐます。私たちが森に隱れようとすることになつたそもそものもとは、みんなこの子供からおこつたのです。母が父大王に、國を讓る

ように請はれたのも、この子供のためです。私たちが逃げねばならぬようになつたときは、父王が母の乞を容れなかつたときであつたのです。この子供は私たちについてきました。そして決して歸ることを欲しません。いま日王子が、森の中の水魔の餌食になつたと云つたら、たれも私の云ふことを信じないでせう。いま私があなたから、日王子を要求するのは、全くこの憎惡の的となることを恐れるがためなのです」。

「立派な、なんといふさとい智惠者だ!!あなたは智惠にみちてゐるばかりでなく、全くあなたの行が智惠によつて動いてゐるのです」。

水魔は、再び菩薩のこの答へに對して、讃嘆の聲をあげました。そこで水魔は喜んで二人の兄弟をともに菩薩に與へました。菩薩は云ひました。

「友よ、現在あなたはあらゆる生物の血と肉とをあさつて生きてゐます。しかし、この現在の生活を導きだしたものは、ほかにあるのではありません。これ

はとりもなほさず過去の罪業が現れたのです。そして、またこの現在の生活に惡を積んでゆきます。この惡行は、また次生の苦みを招かずには止みません。だからこの輪廻しゆく苦惱の境を脱せんとするには、いまよりこの惡行をやめて德を積むように心がけねばなりませぬ」。

水魔は、全くこの言葉に感動してしまひました。こゝに菩薩は、水魔の保護をうけて、この地に住むことになりました。

それは或日のことでした。菩薩は星を見ることによつて、父の死を知ることができました。そこで菩薩は、かれらをつれて波羅奈斯に歸り、月王子を副王に、日王子をその元帥にして、王の位に即きました。

水魔も古の水魔ではなく、いまは樂しく家をもち、身體は美しい種々の花に纏はれ、ひたすら王の外護者となつてつとめました。そして正しく生きることができたのです。

この物語は、往昔、世尊が逝多林に居られた頃、ある一人の富裕な弟子を、戒められたときの物語であります。

世尊はこの物語をなし、更に四聖諦を述べられました。これを聞いたかの比丘は、神通果を得ました。世尊は、この富裕なる比丘は、かつてその水魔でありました。そして阿難陀は日王子、舍利弗は月王子、私自身は一番大きいマヒムサー王子であつたと仰せられました。(了)

海を越えて

世尊は一人の背教者を御座近くお招きになつて、おまへの背教者となつたのは或る婦人が過去世に罪をつくらしめたためだと申されました。そして次のやうな物語を遊ばされました。

かつての昔、波羅奈斯國の王梵摩達多が若かつた頃のことでありました。王は皇后にむかつて、どうかして一人の皇子の生れて欲しいことを願はれました。國中の人たちも皇子のあるやう祈るのでありました。

まもなく菩薩が梵天から降下され、皇后は懷姙されました。やがて菩薩は降誕し、産湯をとり、看護の婦人もつけられました。しかし、その小兒は看護の婦人

の乳房を捉へて泣くのでした。それで他の婦人ととりかへましたが、どうしても泣くことをやめなかつたのです。で、男子を看護にしたところが、たちまち泣くことをやめて靜まりました。その後は、その男がもり役をつとめることになりました。

よつて小兒は、母乳のかはりに牛乳を呑むか、またはそれを呑むに衝立のなかで呑みました。そして成長しても、女を見ることをすきませんでした。父王は小兒のために、寢所や、また離れた御殿を新築して、小兒のみの專用としました。

王子が十六歳になつたときでありました。父王は「自分にはたゞあの王子よりほかに子供はない。それに愉快をちつともこのまない。また王國をのぞんでゐない。かゝる王子のよしとするものは何であらうか」と、つく〴〵思案にふけりました。

所が、こゝに一人の踊り女がありました。その女は非常に踊が上手であるばかりでなく、歌も音樂もすぐれてゐました。その上若く美しいので、彼女を見るものは誰でも心をうばはれないものはありませんでした。その踊り女は王に近づき何を御心配してゐられるか尋ねました。で王は逐一その心配を打ちあけて物語られたのです。

「王樣よ、御心配はいりません。妾が王子のお心を慰めます。きつと王子は妾を戀されませう」

と、彼女は申しました。

「よろしい、どんな女でも動かすことができなかつた王子を誘惑することができたなら、王子はきつと王位につきあなたはその后となることができませう」。

「王樣よ、御心配なさいますな。妾にお任せ下さいませ」。

女は守衛の人たちのところにゆき「明朝、妾は王子の寢所近くゆき、王子が默想してゐるその外側で歌を唱ひませう。もしも王子が御立腹でしたら、妾にお告

げ下さい。さうしたら妾は歸つてゆきます。もしも王子が耳をすまして、歌をお聞きでしたら、妾を褒めてお話し下さい」といふのでありました。守衛の人たちはそれに同意しました。その翌朝彼女は皇子の寢所近くで、美しい聲で歌を歌ひました。美しい聲は音樂か歌か、歌か音樂かとあやしまれるほどでした。王子はその歌に聞きとれました。その翌朝王子は彼女にまた歌ふことを命じたのです。その次の日は室に入れて歌はせ、その次の日には王子の面前で歌はせました。かくて、皇子は一日々々と戀の路におちてゆくのでした。戀の快樂を知るにいたつたのです。「この女は決して他人の手には渡さない」と決心しました。王子は劒をぬき、町のなかを狂ひまわり、人民どもをおひまくるのでした。そこで父王はやむなく王子を捕へ、踊り女と一所に遠い國へ放逐しました。

王子と踊り女は連れだちて、深い森の中、けはしい籔林の中を通りぬけ、恒河(こうが)のかたほとりに出ました。そこは丁度一方は河、一方は海に面したところでありました。彼等はそこに小さい小屋をたて、彼女は家にゐて食事をとゝのへ、王子は山や森に出かけては食料を集めるのでありました。

それは或る日のことでした。皇子はいつものやうに食料を集めに出かけて留守でありました。その時でした。海中にある一の島に住んで、陸へ自分の食物を乞ひにくる隱者がありました。その隱者が空中を飛揚してゐるとき、王子の小屋から煙の立つのを見たので、直ちにその小屋をめがけて降下しました。そして食物を乞ふのでありました。

「食事ができるまで、そこにお待ちなさい」

と、彼女はいひました。しかし彼女の美しさは、この隱者の心を捉へずにはおきませんでした。そこで、かの隱者は神通を行つて、遂に、彼の清淨さを汚すこととなりました。隱者は翼を失うた鴉のやうに、彼女のそばをば離れないで、一日中そこにゐました。しかし王子の姿を見るや海をさして、一目散にその姿を空

中にかきけしました。王子は憤怒のあまり、これを追撃したのです。隱者は一度空中に飛揚しましたが、忽ちその通力を失つて海中に落ちてしまひました。王子は思ひました。

「さうだ。あれは隱者だ。空中高く飛揚する自在をもつた隱者なのだ。しかしもう彼の神通は失はれたに違ひない。で、彼は海におちたのだ。あの隱者を救つてやらう」。

王子は海岸にでて、次の句をくちずさみました。

神通力で、海に落ちないやうに
長く高く飛行するやうに祈れ
女の惡しき仲間により
おまへは海に落ちたのだ

たくみなる誘惑の手管よ
そはすべてを欺いて
清い心を墮し誘ふ
墮落から放たれるものは
女のこゝろをしりつくすとき

たゞ名と利に齷齪するものは
火中にある薪炭のやうに燒かるゝ。

隱者は皇子のこの言葉を聞いたとき、海の眞中にたちました。そして失はれた神通はふたゝび回復されたのです。そこで空中高く飛揚して彼の住ひに歸つたの

です。

王子は再び想ふのでありました。「あの隱者は綿のはしのやうに空中をとび去つていつた。だがなぜ私は、かれのやうに空中を飛ぶ神通を研究することができないのだらう?」。そこで王子は海岸から小屋に歸り、妻を離緣し、自分はたゞ獨り鼓林のおく深くわけいりました。そこに住心地のよい場所をえらび、小屋をかけて、隱者となりました。かくて王子も神通を習ひ、やがて梵天に入ることが出來ました。

この物語は世尊が逝多林にゐませし頃、或る一人の背敎者に向つて物語られしものであります。そして、この物語を終られて、世尊は「婦人と一所には何事も出來なかつた王子は私自身であつた」と仰せになりました。(了)

生命の貴さを知れ

昔、商用に旅立つ人々は、多くの犧牲を屠つて、これを神々に供へ、さらにつぎのやうなることを神に祈誓して、でかけたものでありました。

「おゝ神よ、もし神の私たちに利を與へ、ふたゝびこの地につゝがなく歸ることを得せしめ給ふならば、私たちは更に犧牲を捧げませう」。

かく祈誓して、つゝがなくしかも潤澤な利益をもたらして歸ると、人々はさらに生ける動物を屠つて、これを神に捧げ、さきの祈誓に正しく報ゆるのでありました。このことを知つてゐる比丘たちは、いちやうに「世尊よ、この供物のなかにいかなる功德がありますか?」と尋ねました。そのとき世尊は次の物語りをされたのでありました。

本生物語抄

かつての昔、伽尸國のあるさゝやかな村の地主が、その村の入口にある榕樹の仙人に、犧牲をさゝげることを誓つてゐました。その後、地主は旅から歸つてきて、澤山な生物を殺し、誓を解かんがためにその犧牲をもつて、榕樹のところにやつてきました。ときに榕樹仙人は、枝の叉に立つて、つぎのやうにその地主に告げました。

誓をとくまへにまづ生けるものの生命の貴さを知れ
この「許し」こそは嚴しき束縛である
智者も吾人もかくては解放されることはない
愚なるものの許しは、ついに束縛の果となる。

かくしてそののち、人々はものの生命をとることをやめ、正道を歩んで梵天に

生れました。

この物語は、かつて世尊が逝多林に於て、神々に祈願して、犧牲を供することのいかなものであるかを示された物語であります。

世尊はこの物語を終へ、現在の私自身が榕樹仙人だと、のべられました。

悪友

かつての昔、波羅那斯國の王梵摩達多の御代、菩薩は大蜥蜴に生れ、だんゞ成長するにしたがつて、すべての頭となりました。菩薩はかれらの仲間をつれてある川邊の大きな穴に棲みました。そして菩薩にはひとりの小供がありました。その小供である小さな蜥蜴は、カメレオンとなかよしで、いつもふたりで、抱きあうたり撫であつたりして戯れてゐました。このふたりがなかよくしてゐる噂がやがて王たる菩薩の耳にいりました。菩薩は直ちにその息子を呼びよせて、つぎのやうに誡めました。

「お前の親しくしてゐるカメレオンは、いつ背を向けて裏切るかわからぬやうないやしさをもつものです。あんなものにいつもお前は親しくしてゐてはいけ

ません。もしお前がこのまゝ意地をはつて、その交情をつゞけたなら、その災はお前だけでなく、われわれ蜥蜴の種族のすべてに及ぶ恐しい日が、きつとくるにちがひありません」と、菩薩はいくたびも子供に云つてきかせました。けれども子供は無頓着に、父の云ふことには、更に耳を傾けようとはしませんでした。しかし菩薩は、恐るべきカメレオンの迫害が、いつかは種族のすべてにふりかゝつてくることが、ありありと眼に見えるやうでありました。そこで菩薩は、萬一の場合を慮つて、洞窟の一方に出口をつくりました。

月日のたつとともに若い蜥蜴は一層大きくなりました。しかしカメレオンはそのまゝ大きくなることはありませんでした。そこでカメレオンは、若い血氣盛んな大きい蜥蜴がする抱擁が、いまさらに怖くなりました。いまさこしすれば、この抱擁はおれを殺すだらうと思ひました。そこでカメレオンは獵師とはかつて、蜥蜴全體を破滅させようと考へたのです。

それはある夏の日のことでありました。多くの蜥蜴は、大雷雨のあとに巣から這ひでた蟻のむれを見つけ、あちらこちらに急しくとびまわつて捕食してゐました。そこへひとりの獵師が、鍬をもち犬をつれて、蜥蜴を生捕りに森へやつて來ました。これを見たカメレオンは、うまいことになつたと考へ、その獵師に近づいて、この森へなにしに來たかを尋ねました。獵師は「蜥蜴を捕りにきたのです」と告げました。

「さうですか、それはよろしい。私は都合よく澤山な蜥蜴の棲んでゐるのを見つけて知つてゐます。で、あなたに敎へてあげますから、炬火と柴とを用意して、私の行くところへついておいでなさい」と、カメレオレはその獵師に告げました。かくして獵師を蜥蜴の巣のところにつれてきました。

「さあ！そこに火をつけて、その煙で蜥蜴の奴等を燻しだすのです。そして、あなたのつれてゐる犬をあたりにくばり、あなたはその棍棒を手にもつて、蜥

蜴のとびだすやつを一擊の下にうつ殺してやるのです」。

さう云ひながらカメレオンは近くに退きました。そして、寢轉んだまゝ、わづかに頭をかしげて誇やかにひとりごとを云ひました。

「今日こそあいつらの最後を見物するのだ」。

獵師は、火を焚いて穴を燻し始めました。その生命がけな恐怖に、蜥蜴は穴にゐたゝまらなく、あはたゞしくその出口に驅けだしました。そこでまち構へてゐた獵師は、出てくるやつも出てくるやつも、かたつぱしからなぐりつけました。

もし獵師がしくじつたときは、まち構へた犬がこれを嚙み殺しました。

かくして恐ろしき虐殺が、蜥蜴の種族に行はれました。このとき、この虐殺がカメレオンの所爲であることを察した菩薩は、

「私たちは心惡しきものとともに交つてはなりませぬ。かれらは恐るべき害心を抱いてゐます。たゞ一つのカメレオンは、この恐ろしくも種族全般の破滅を

もたらしました」と叫びました。かくて菩薩は、あらかじめつくつておいた逃口から、難を脱れることができました。菩薩はまたかくの如き詩をとかれました。

惡しきものとの交りに
決して好き結果はない
一匹のカメレオンとの交りさへ
蜥蜴一族の破滅を招いた。

この物語は、かつて世尊が竹林精舍に於て、不實な一比丘について話されたものであります。この物語を終らるゝや、世尊は「提婆達多はそのころのカメレオンでありました。不實なるこの男は、菩薩の子なる若き蜥蜴であり、私こそその蜥蜴の王でありました」と結ばれました。

毒果を食ひし人々のやうに

嘗つて、世尊の敎團に、つとにその敎說に心醉して身をよせて居た名門出のうら若い一人の青年の比丘がありました。ある日、この比丘が伽尸國に行乞してゐますと、美しく着飾つた女性の姿が、ゆくりなく彼の眼をかすめてすぎゆきました。比丘は一目そのすがたを見るや、あるべくもない異常の胸のどきめきを覺えすさまじい情慾のほむらの燃えうつるを感じました。やがて、比丘は敎團の長老たちに導かれて世尊の御前に出たとき、彼は、世尊のおたづねのまゝにすべてを申し上げました。そのとき世尊は仰せられました。

「比丘よ、まことに五官の慾は、それが滿足にとげられる刹那に於て、あさましい人間の快感をそゝるものである。しかし、このあまい歡樂の惑溺こそは、

あたかも毒の木に生ずる果實を食ふに等しい愚かなことである。そのうちには地獄や其の他の惡道に墮ちる恐ろしい種子がふくまれてある。その果實には、人をあざむく美しさがある、香がある、味がある。そして一度これを口にすれば、毒はたちまちに全身を靡爛してつひに死に導くものだ。嘗て、その美しさと香氣と甘味とにあざむかれて死滅にいそいだ多くの人たちがあつた。その人人は、果實のもつて居る惡い質に思ひ至らなかつたからである。過去の世に次のやうなことがあつた。よく思ひはかられるがよいであらう」とて、次のやうな物語をあそばしました。

かつての昔、波羅奈斯の梵摩達多王の御代、菩薩は隊商の首領として生れました。一日、菩薩は五百の車をつらねて東から西に旅をつゞけてゐましたが、やがてとある森の端にきました。ときに、菩薩は仲間のものたちを集めて云ひました。

「この森のうちには毒の果實のなる木が、無數に生い繁つてゐます。だから、決して無斷で名もしらぬ果實を口にするやうなことをしてはなりませぬ」と。人々がその森の他の端のところまで來たとき、そこには美しいつやゝかな果實が、無數に枝もたはまぬばかりになつてゐるのでした。しかも見たところでは、それらの木は、その形と云ひ、香と云ひ、また幹といはず、枝葉と云はず、その果實までが檬果にそつくりでありました。そこで仲間のあるものは、マンゴーと思つて直ぐさま食べたものもありました。また、首に話してから食べようと云つて、木から果實をちぎつたまゝ菩薩の來るのを待つてゐるものもありました。ところが菩薩は、人々の持つ果實をみんな捨てさせ、すでに食べた人たちには吐藥を與へて服すのでありました。しかし、眞先に食べたものはみんな死に、後に食べたものゝみがわづかに生命をとりとめたのみでありました。菩薩は、間もなく安全に目的の地について商賣をすませて、ふたゝび家に歸りました。其の後、彼はあら

ゆる善行や慈善の報ゐによつて、安らかに一生を終つたのでありました。

かくして、世尊は佛陀として次の偈を說かれました。

毒の果實を食ひて生命の破滅を招く人々の如く
ひたすら肉に荒み未來の憂を想はざれば
これまた同じ運命に呻吟する。

かやうに世尊は、肉慾に沈湎するものの恐るべき破滅をのべ、さらに四諦を說かれました。このとき、肉慾にとらはれてゐた件の比丘は、忽ちに初道果を得ました。また、佛陀の下に侍つてゐるうちには、或は第二道果を、或は第三道果を得、または阿羅漢果を得たものもありました。

この物語を終らせられた世尊は「現在、私の弟子たちはそのころの隊商の仲間であり、私自身は、當時の首領であつたのでした」と仰せられました。(了)

及ばざることこと

世尊は、一比丘の理不盡を誡めらるるに、次の言葉をもつてせられました。

「比丘よ、おまへは現在のやうに、過去世にあつてもまた賢人に耳を傾くることをさげすんだ理不盡な男でありました。そしておまへの生命は、一本の槍のために泯びたのでありました」。

かくて、この過去世の物語をせられました。

かつての昔、波羅那斯國の梵摩達多王の御代、菩薩はある輕業師の家に生れました。生れついた聰明さと慧敏さは、流れる月日のなかにみがかれてゆきました。菩薩は、いま一人の輕業師について、槍の踊をならひ、旅から旅をつゞけて、つ

ねにそのすぐれた腕前を見せてゐました。その師匠といふ人は、かねて四本の槍で踊る術に長けてゐました。けれども、まだ五本を用ゆるすべはしりませんでした。

一日、ある部落で興行をつゞけてゐたとき、酒によつてゐた師匠は、五本の槍でうまく踊つてみせると、人々に觸れまはらせました。そのとき、師匠の亂暴をみかねた菩薩は、師に云ひました。

「師よ、四本はまだしも、五本で踊ることは危いことです。一本だけ除きなさい。もし強いてお踊りなさるなら、それは命の賭にすぎないでありませう」。

「なんだつて、お前はまだわからないのだよ。やらうと思ひさへすればどんなことだつて出來るものだ。みてゐるがいゝ」。師匠は、この憍慢な言葉を吐きだすやうに云ひました。

そして菩薩の言葉には、耳もかせないで踊り初めました。しかしそれは、いたましくもまたおそろしい身の破滅だつたのです。師匠は槍の穗先につきさゝれたまゝ、大地にへたばつて苦しさうに呻吟をたてました。このとき菩薩は「この戰慄すべき禍は、賢い人の言葉に耳をかさないことより起つたのです」と云ひ、

わが意を汲まずして、なせし君
さてはつゝがなき師
はてはかなしき破滅。

と歌はれました。そして師のむくろを槍から離し、又なすべき最後の義務を終つたのでありました——。この物語は、嘗て世尊が逝多林に理不盡な一比丘を誡められた物語であります。世尊はこの物語をなし終つて「この理不盡な比丘は、かつてその輕業師であり、私自身はその弟子であつた」と仰せられました。（了）

監視

かつての昔、波羅那斯國の王梵摩達多の御代のことでありました。菩薩はヒマラヤ山中に住む八千からの群をなす猿の一匹として生れられたのでした。そこからほど遠くない、或る一村がありました。その村は民家が三三五五と點散してゐる、ほんの閑村でありました。この村の丁度中ほどにあたる所に、大小の枝葉が繁り、美しくおいしさうな果實が澤山枝もたはむほどに熟してゐる一本の柿の木があつたのでした。幸ひにも、その樹のあるところは、民家がないので、猿どもはいつもそこに出かけて、果實を食ふのでありました。

それは或る年の果實時でありました。この村に人たちが澤山に住み込んできました。竹の杭でその村の周圍をとりかこみ、あちらこちらの門には、門番をつけ

るやうになりました。そしてあの柿樹も果實の重みで大小の枝が地上につくほどたわみ、これを棒でさゝへねばなりませんでした。猿共は不平を抱きはじめました。「いつも果實を食べにいつたあそこの村が、こんなになつてきたが、いつたい今頃は果實が熟してゐるにちがひない、それともなつてゐないだらうか、あの柿の樹の附近には人々がゐるのだらうか」。つひに猿どもは協議をして密偵猿を間諜として出すことにしたのです。ところがその猿は歸つてきて、樹には澤山の果實が熟してゐることや、村には大變の人たちが住んでゐることなどを報告しました。これを聞いた猿どもは、もはやぢつとしてはゐられないので、果實を食べに出かけることに決議をしたのです。猿どもは勢ひこみ、元氣づきました。で、猿の頭に相談をもちこんだのです。

「その村には澤山の人たちがゐるのだらう」

と、猿の頭は問ひました。

「勿論澤山に住んでゐます」

と、猿共は答へました。

「では、そこへはゆかれないではないか、人間は狡猾な奴だから」。

「頭よ、然し、私たちは眞夜中にゆくのです。みんな人間どもが寢てゐるときに」。

かく、澤山の猿どもは決議して、頭のところを去りました。そして山を下り、大きな岩の上で、人たちの仕事をおはるのを根氣よく待つのでした。そして人々の寢靜まる眞夜中に猿どもは、その樹にのぼり、果實を食べはじめました。

ところが、一人の男が何にかの急用で、夜中この村にやつてきました。そして猿どもが一生懸命になつて果實を食べてゐるところを見つけたのでした。で、その男はさつそく警鐘を鳴らしました。村中の人たちはみな一時に起き上つて、弓や矢や槍や棒切など、手に〳〵手頃のものを各自にもつて集つてきました。そし

てその樹をとり圍んでしまひました。そしてもしも猿どもが樹から下りてきたら生捕りにしてやらうと、わめくのでした。この突然な出來ごとに、澤山の猿どもは果實を食ふ元氣もなく、全く生きた心地はなくなつてしまひました。「もしもわれわれを救つてくれる者があれば、我々のお頭よりほかはない」と、猿どもはお互ひに想ひあひ、猿の頭のところにゆき、そして次のやうにいふのでした。

「我れ〳〵を取り圍んでゐる人たちは、弓や矢で身をかため、手には刄や棒切を提げて待ちかまへてゐるのだが、我れ〳〵を誰が救うてくれるだらう」

と。この言葉を聞いた頭の猿は次のやうに答へました。

「恐れることはない。だいたい、人間は色々とせなければならないことがあるものだ。今は丁度眞夜中だ。人たちはかうして我れ〳〵を取り圍んでゐる。そしてキット我れ〳〵を殺してくれようと思つてゐるに相違ない。だが、その人たちを欺く手段はまた色々とあるのだから、さう心配することはない」

と。また、

「だいたい、人間はなにかしなければならないものだ。この果物は、どうせどうにかして分配されるものだ。何かお前らの爲に殘されてあるのだと思つてゐる。食ふことなのだらう。この果物は食ふ爲に殘されてあるに相違ないのだ」。

頭の猿は猿どもを慰めるのでした。若しもこの僅かな慰めでもなかつたら、猿どもは心臓が破ぶれて自滅するところでした。

かやうに頭の猿は慰め終つて、猿の全部が集るやう號令をかけました。ところが、集つた猿どもの中に頭猿の甥のセナカが獨り姿を見せませんでした。みなのものは驚き、そのことを頭に告げますと「なんだセナカがゐない。さうか、べつに心配しないでもよいだらう。彼はキットお前らを救ふ方法をとるだらうから」。

猿どもの一群が果實を食ひに出かける時でした。セナカは寢てゐたのでした。眼が覺めてあたりを見ましたが、誰一人ゐないのです。そこで彼はその邊りを探

じまはつたところ、澤山の人たちが騒いでゐるのを見ました。「友だちの群に危險がきてゐるのだ」と思つたのです。彼は早速に村のはづれの、とある一家に忍び入りました。その家の内には一人の老婆が火を點しながら寢てゐるのでした。彼は村の子供が野畑へ出かけるといつた風に裝つて、火把を盗んだのです。そして風上から村に火を放ちました。これを見た村の人たちは驚いて、猿どもをすて急ぎ火事場にかけつけました。それで猿どもはやうやくにのがれることが出來たのです。そして一匹々々セナカに果物を取つて來て與へました。

この物語は世尊が逝多林にゐましたころ、全智全能といふことに就て物語られたものです。世尊は過去、現在に亘り、そしてすべての點で優れてゐられるのです。ときに世尊は「頭猿の甥のセナカは摩訶那摩(まかなま)で、猿の群といふのは佛弟子たちで、頭は私自身であつた」と仰せられました。(了)

すべてをこのまざる

世尊は婦人といふ者は多くは正義を缺いたもので、どうかすると夫を罪に落したり、或は欺くものであると仰せられ、そして次の如き物語を試みられました。

かつての昔、波羅那斯の國王梵摩達多の御代のことであつた。菩薩は伽尸國の或る一家の息子として生れられました。成長の後結婚せられ、一家の主人となり、て身を堅められました。しかし不幸にして、その妻は奸智な女でした。そしてその不身持は、つひにその村落の酋長と密通するやうになつたのでした。そしていろ〳〵と奸策をめぐらして、夫の目をかすめてゐました。夫の菩薩は、かうしたことを嗅ぎつけずにはゐませんでした。で、どうかして彼等の奸策を試めしてや

り、そして姦夫姦婦をとりおさへてやらうと思ひ惑うてゐたのです。

をりしも雨期がやつてきました。その年は非常な降雨であつたので、すべての穀物は失はれ、そこへつひに饑饉がやつてきました。小麥はまだ發芽の時節でありましたため、日に日にその食料は減つてゆくばかりでありました。村の人々は時をり集會して相談をひらきました。かくてつひに、村人たちはそこの酋長へ懇願に出かけたのです。

「今日から二ヶ月程したらきつと穀物が收穫されます。そしたら同じ品物をお拂ひ致しますから」

と。かう願ひをした村人たちは、老耄の牡牛一匹をもらひました。そしてそれぞれそれを分けて飢ゑを慰したのでありました。

ある日のことでありました。時機を睨つてゐた酋長は、菩薩の外出を見はからつて、婦人の宅を訪づれました。そして、二人のものが、お互ひに密語を交へ、

抱き合つて樂しむをりしも、夫の菩薩は村落の門に在つて家の方を振りかへつてゐたのでした。これを見た女は驚きながら「誰でせう。あそこにゐるのは?」とつぶやきながら、戸口に走り出て見ました。

「あの人だ!」

女はそれが夫であることが知れたので、急ぎ室に入つて情人の酋長にそのことを話しました。酋長は驚き慄へてゐるばかりでありました。女は酋長を慰めながら、そんなに怖れることはありません。妾が妙案を知つてゐますから。知つてゐらつしやるとほり、あなたから食物を借りてゐます。それであなたは食物の代償を色々と探してゐる風をするのです。妾はこの穀物倉の戸口に立つて「お米はこのとほり有りません」といひますから、あなたは室の眞中程に立ちながら「私には子供が澤山あるのだ。で先日かした牡牛の代償を支拂つてくれ」と、かういふ風に互ひに話しあふのです。奸智にたけた女は酋長に敎へるのでした。そして女

は穀物倉に上つて戸口に立ちました。酋長はその室の中程に立ちながら「牡牛の代償を支拂つてくれ」と叫びました。女はこれに應へて「これ、このとほり穀物倉には少しのお米もありません。刈入れができたら、その時きつと御約束どほりお返し致します。どうかそれまでお待ち下さい」と云ひました。

菩薩は我が家にかけつけました。そして彼等がなにをしてゐるかを見てをりました。この有樣を見て、これはきつと奸智にたけた女の謀みごとに相違ないと知れました。で、酋長に向つて言ひました。

「酋長よ、私共はあなたから老耄れた牡牛を一匹借りてゐます。然しそれは、二ヶ月後には是非その代りとしてお米を支拂ふことに約束したではありませんか。それにまだ一ヶ月もたつかたたないかの今日、あなたは今にもそれを支拂へとお仰るのですか。大體あなたが此處にお出になる理由は少しもないではありませんか。それに、もしもありましたら外の用事で御出になつたのでせう。

どうもあなたの樣子が面白くありません。また心のよくない奸智にたけて、欺くことを何んとも思はない女は、穀物倉に米のないことをよく知りながら、穀物倉の戸口に立つて「こゝにこのとほりお米は少しもない」といひ張り、あなたはあなたで「支拂へ」と叫んでゐられますが、いつたいみなのやつてゐることが腑に落ちません。のみならず、私は心から好かないのです」。

菩薩はかういひながら、なほつゞけて次の句を口ずさむのでした。

「私はすべての事柄を好かないのです。穀物倉の戸口に立てりながら支拂は出來ないといふ女も好みません。また、あなたでもです。まあ、靜かに聞いて下さい。僅かの間です。あなたはやせた老耄れの牡牛一匹を私どもに借して下さいました。然し、その際二ヶ月の猶豫をされたではありませんか。それだのに……一ヶ月たつかたたないかに、それを支拂へとは、まあ、なんのことかわからないではありませんか」。かくいひ終るや菩薩は、怒りのあまり酋長の頭

に結んだ髻を鷲づかみにして、庭に引きおろし、思ふさま打ちのめしました。

「さあ、酋長よ。これが牡牛の代償だ。人々のまへで支拂つてやるのだ」。

かういひながら、酋長の氣を失ふまで苦うち、首筋を引つ捕へて家外に投り出しました。それと同時に、女の頭髮を引つ捕へ穀物倉からひきおろして、鞭ちながら「もし今後かうした不義をくりかへすなら、かうした浮目を見ることを覺えておけ」と、ところかまはず打ちのめしました。そののち酋長は、二度とこの家に姿を見せませんでした。女はまた誓のとほり改心して、貞節となりました。

この物語は世尊が逝多林に御滯在の砌り、一人の墮落僧に就て物語られたものであります。この物語を終られて世尊は眞理の要諦を縷述し、墮落の弟子らを敎導し、阿那含果を得せしめられました。かくて酋長を鞭ち罵つた善良人は、私自身であつたと語られました。(了)

すなほならぬ女

心も狂はんばかりに、女の愛に溺れてゐた一人の男は、たづねらるゝまゝ、世尊の前に、すべてに心に蟠る悶えと苦みとを、あからさまに表白したのでありました。

「比丘よ、すべての女を見よ、かれらはみんな恩を知らないで、たゞ仇をかへすことのみを知つてゐる恐ろしい裏切者ではありませんか。それにあなたはかくの如きものに心までも奪ひ去られると云ふやうなことを、なぜ恥ぢないでゐられますか」。さう云つて世尊は、次の言葉を續けられました。

かつての昔、波羅那斯が梵摩達王の治下にあつたころ、菩薩は隱者の生活を求

めて、恒河の畔にみづから庵をむすんでゐられました。菩薩はそこで得道し、また最勝智を得、かくて天眼通をも得られました。そのころ波羅那斯國には、ひとりの娘をもつた大臣がありました。その娘といふのは、きはめて荒々しい亂暴なたちで、たれ一人として「惡性女」といふ名を知らないものはないほどでありました。しばらくでも召使や奴僕を怒つたり、うつたりすることを忘れるやうな、そんななまやさしい女では決してありませんでした。

それは或日のことでした。人々はこの姫を誘つて恒河に遊び、人々はいつしよに水のなかに戯れてゐました。そのうちに日は沈みました。と、思ひがけなくも大嵐が襲つてきたのです。いままで遊び戯れてゐたそれ等の人々は、家にいそいで走り歸りました。けれども姫の從者たちは、「今にどうなるか見てをれ」と云ひながら、姫を河のなかになげこんでしまひました。雨は車軸を流すやうに、勢ひこんで降つてゐます。日はもうとつぷりくれて、あたりはものすごい暗黑に襲は

れてゐました。

大臣の邸では、従者たちは歸つたけれども、かんじんの姫の姿はいつまでたつても見えませんでした。従者たちにたづねると、姫様の恒河をぬけでたことだけは見ましたが、そののちどうなりましたか知りませぬと、みんないちやうにこたへるのです。ついで大捜索は行はれました。けれども姫のゆくへは杳としてわかりませんでした。

河のなかになげこまれた姫は、聲をかぎりに救ひをよびながら、烈しい急流に押し流されて、眞夜なかごろ菩薩の捿んでゐる、庵のまへにさしかゝつたのでありました。その悲鳴を耳にした菩薩はすぐ思ひました。「あの悲鳴は女にちがひない。すぐ水の中から救ひださねばならぬ」。菩薩はすぐ柴の燈炬をつけて、河のなかに溺れつゝ流れる女の姿を見つけました。「もう大丈夫、心配しなくていい」。力をつけるために菩薩は、かう叫びながら、象のやうにさかまく波をおしわ

けて、つひに女を安全な陸に救ひ出しました。それから女のために火を燃いたり飢を充す果物を與へたりして看護をしました。その間に菩薩は、女の家やまたどうしてこの急流にはまりこんだかをたづねました。女はいままでのすべてのことをつげました。

菩薩は「暫らく自分の家にとゞまるが可い」さう云つて女をとゞめ、自分の家に捿せました。かくて二三日のあひだ、菩薩は野天で日を送つたのでした。そのち菩薩は、女に家にかへるやうにすゝめたけれども、女はこの行者を戀人として口説きつけるまでは、決してかへるまいと思ひさだめてゐました。でその言葉に耳を傾けようとはしませんでした。そして來る日も來る日も、女はあらゆる女の魅力と蠱惑で、菩薩の智慧をくらまし、またその自在力をも奪つてしまひました。かくてこの二人は、森のなかに睦じう住む身となつたが、女はこの淋しい庵をきらつて、町に出たいと云ひだしました。菩薩は、女のせがむまゝに、この庵

をすて、遥かなほとりの村里に移り住みました。菩薩は、そこでナツメジュロの果實を賣つて女を養ひました。それがため、村人は呼んで「ナツメジュロの哲人」と云ひはやしました。村人たちはこの哲人に、時節の吉凶などをたづねに來ました。そしてつひに、村の入口にさゝやかな家を建てゝくれました。しかしこの土地は、しば〳〵山賊どもに荒されるところであつたのです。をりしもまた或日、この山賊どもの荒すところとなつたのでした。村人のあらゆる持物はもちろん、この哲人の女まで盗んでいつてしまひました。この女のみでなく、ほかの人たちも、山賊の住家に連れてゆかれたものもあつたが、みんなゆるされて歸されました。たゞこの女は美しいために、つひに山賊の頭目の妻とならねばなりませんでした。女をさらつてゆかれた哲人は「女はきつと自分を離れて住むことは苦しいにちがひない。いつかはぬけだしてこゝに歸つてくるだらう」と考へて、ひたすら女の歸りをまつてゐました。しかしそれは女にとつて思ひもよらぬことだつた

のです。女は初めこそ哲人のことを思つたが、まもなく山賊どもの荒々しさに馴れ、つひには連れだされた自分の幸福を感じてゐたのです。かへつてナツメジュロの哲人が、再び自分をつれにきはしないだらうかと云ふことが、むしろ不安な心持となつてゐたほどでありました。

女は思ひました。「いつそあんな人は死んでしまへば可い。さうだ、可いことがある、私からいかにも愛があるやうに見せかけ、あまくこゝにおびきだしてすぐ殺しさへすれば可い」。そこで女は、私はいまさびしく涙の日を送つてゐます一日も早く連れだしにきてくださるやうにと、巧みに使ひの者をやつて哲人に告げさせました。女を信じきつてゐる哲人は、飛びたつ思ひにすぐさま家を出て、山賊どものゐる入口までできました。そして女に使をやりました。しかし女の答へは「あなたよ、いまぬけだすとすぐ見つかつて、二人とも殺されてしまはなければなりませぬ。どうぞ夜までまつてください」と、云ふのでした。さうして女は

菩薩を室のなかにかくまひました。

夜がきました。山賊が強い酒をあふつて歸つてきました。そのとき女は山賊に告げました。

「あなた！、あなたはもし敵があなたの掌中にあるとしたら、どうなさいますか？」

山賊は自分の思つてゐることを女に囁きました。女はまた云ひました。

「さうあなたの思つてゐるほど遠いところぢやありません。直ぐ隣の室です」。

これを聞いた山賊は、炬火（たいまつ）をもつて哲人のゐる室に飛込み、哲人を捉へるやいなや、思ふぞんぶん頭からなぐりすえました。しかし菩薩は、なにも云ひませんでした。たゞ、そのもらした言葉は「薄情な恩しらずよ！よこしまな叛逆者よ！」と云ふだけでありました。山賊は思ふまゝにうちのめしたのち、菩薩を身動きのできないやうに縛つて、ゆつくり夕食を食べ、ついにぐつすり寢てしまひました。

やがて朝になると、山賊はまたてきびしくなぐりはじめました。しかし哲人はかたく口を緘ぢ、たゞまへと同じ文句を低い調子で囁くのみでありました。そのときにふと山賊は、哲人の動作がいかにも仔細のありさうなのに氣付いて、その譯をたづねました。

「おまへがそんなに聞きたいと思ふなら話をしよう。實はかう云ふわけなのです。かつて私はたゞ獨り森のなかに隱者の生活をして、なんでも見通す自在力をもつてゐました。そのじぶんあの女が恒河に溺れてゐたのを救つたのは、この私でした。そのうちに女はあらゆる女の蠱惑で、私の折角たどりついたその高い地位をだいなしにしてしまひました。それからといふものは、女のせがむまゝにその森を去りて、村に出てゆきました。女が盗み去られたのも丁度そのときでありました。が、ついさきのことでした。女は私のところへ使をよこして、さびしくとらはれてゐる私をどうか助けて下さいと云つてきました。しか

しこれは女の邪悪な一策にすぎなかつたのでした。それがために、うま〳〵と私は、穽のなかにおちてしまつたのです。私のつぶやく言葉は、たゞこれだけなのです」。

この話しを、ぢつとしまひまで聞いてゐた山賊の心は、大きに動きました。そして思ひました。「もし女がそんなに恩をうけた善良な人にさへ、こんなことであるなら、この自分に對してもなにをするかわからない。女はいま殺してしまはねばならぬ」。そこで山賊は哲人をなぐさめたのでした。

山賊はいかにも今自分が哲人を村はづれで殺すやうに見せかけ、女に哲人を捉へてゐるように云ひつけました。そして哲人を斬るなりをして、その哲人をしつかとゝらへてゐる女を、眞二つに斬り落しました。

それから山賊は、哲人に沐浴をすゝめ、數日のあひだ心から御馳走をしてもてなしました。最後のわかれとなつたとき、哲人にたづねました。

「あなたはこれからどこにお越しになります?」

「この世のなかは、私にとつてなにの樂しみもありません。私はまたもとの通りあの森にかへつて、隱者になるばかりです」

そのとき、「私も隱者になりたう御座ります」と、云ふのがこの山賊の言葉でありました。

そこで二人はこゝを去つて森に隱者の生活を初め、ともに勝れた智慧と悟に入ることができ、この世が終れば梵夫に生れるところまで進んだのでありました。

この物語はかつて世尊が逝多林にゐましたとき、女の愛に溺れきつてゐた一人の男についての物語りであります。世尊はこの物語を說き終り、佛陀として次の偈をおひきになりました。

すなほならぬ女は人を誘り、恩をかへすに仇をする
あらゆるあらそひの種子は、すべてかれらの手に播かる
人々よ、おまへたちは正しき道を求めねばならぬ
しからば必ずおまへたちの願は成就する。

この物語が終つて、世尊はさらに正法を説かれました。この説法を聞いた人たちは、こゝに初果を得たのでありました。世尊は最後に「今の阿難陀(あなんだ)は、あのときの山賊の頭目であり、ナツメジュロの哲人とは、この私であつた」と仰せられました。(了)

私は苦とせない

大聖世尊が逝多林(せいたりん)にましましたころ、激しい情熱と愛着とに、身も心もうばはれてしまつた一人の男がありました。その男は、世尊にたづねらるゝまゝに、彼が一人の女に我をわすれてこがれてゐるよしを、いさゝかも蔽ふところなく申し上げました。

「世尊よ、もし彼の女を失ふならば、私の生命はまるでたちきれたも同然で御座います。彼の女の美しい姿を見る毎に、私の情熱は益々そゝられてゆくのを覺えます」。

そのとき、世尊は慇懃に仰せられました。

「比丘よ、おまへは、いま彼女がおまへを傷ふおそるべきものであるのを知ら

ねばなりませぬ。過去世に於て、あなたを刑柱に縛し、遂に死滅におはらしめたものは、實に彼女であつたのです。そして又、おまへを地獄の呻吟のうちに沈めたそも〳〵の源は、おまへが臨終に彼女のために流したその幾滴かの涙のうちにあつたのであります。然るに、今また何ゆゑおまへは彼女の愛着に縛られようとするのでありますか」。

かくて世尊は、次のやうな過去の物語をせられました。

かつての昔、波羅那斯が梵摩達多王に治められてゐたころ、菩薩は空中の精として生まれ合はせられました。ときは恰もカッティカーの夜祭で、街々は神の王國と見紛ふばかり美しく飾られ、人々はこの祭にだけはすべて仕事の手を休めるのでありました。しかし、こゝに一人の貧しい男がゐました。この男の持つて居るものは、古く洗ひ晒した、しかも皺だらけの着物がたゞ二枚あるばかりであり

ました。その男の妻は、その夫に媚めかしく告げるのでありました。

「あなた、お祭の日ももう來て仕舞ひました。妾の好きなあの紅花色の重衣を買つて下さい。いゝでせう、お願ひですから。それでなければいつしよに出かけることも出來ません」。

男は云ひました。

「どうして、どうして、この貧しいなかからなにが買へよう。おまへの持合で我慢してくれ」。

「わたしは、この願がとゞかないなら、少しも外なんか出たいとは思ひません。あなたは勝手に他の女をつれて出かけたらいゝでせう」。

「あゝ、どうしておまへは俺をこんなに苦しめるのだらう。考へて見たら、買へないくらゐのことはわかるぢやないか」。

「そりやさうです。あなたの親切が足りないのですもの。王樣の御藏にだつて

そんなものはありはしないと、あなたは仰言るのですか」。

女は執拗に繰返すのでありました。

「妻よ、おまへは何と云つてこの俺を苦しめるのだ。王様の御藏は全く食人鬼の棲んでゐる淵と同じだよ。いままで一人だつて番人を誤魔化して藏に入りおほせたものはゐはしない。愚かなことを云はないで、いままでの分でどうか辛抱してくれ」。

「けれども、眞夜中に入り込んだら、見つけられる氣遣はちつともありはしないですよ」。

男は、このうへ女と云ひ爭ふ元氣はなく、女のためにその望を聞くことを云ひきかせました。男は生命の危さも忘れたものゝやうに、暗い闇を縫うて出て行きました。まもなく男は柵を破つて藏にとびこみましたが、その際に起つたけたゝましい響は、番人の眠をさましてしまひました。すぐに集つて來た番人たちは、

難なく彼を捕へることが出來ました。彼の足には重い鎖がつながれました。そして、男は翌朝、王の前に引き出されて處刑のことを聞かされました。

後手に縛られたみぢめな男は處刑の太鼓をきゝつゝ街外れの刑場に送られました。そして、そこで杭殺の刑にあひました。苦しい攻苦のうへに、烏は男の頭上に集つて、彼の眼玉をゑぐりぬくのでありました。しかし、男は自分の苦痛を忘れて、なほもその妻のことばかり思つてゐました。そしてさゝやきました。

「あゝ、何と云ふなさけなさだ。おまへの着飾つた美しい姿を見、おまへの軟かな腕にわが頭を抱かせて祭の樂しさを味はうと思つた夢は、永遠に消えさつてしまつた」。

そして、さらに彼は詩をうたひました。

いまのわが苦しみは杭に刺さるることでない

われを惱ます鳥の群でもない
げにわが苦しみはいとしき妻のこの祭日に
美しき衣を纏ひ得ないことである。

男はかく妻のことを口走りつゝ身を終つたのでありました。そして彼は地獄に生れたのでありました。

世尊はこの物語を終らせらるゝや、「過去世の夫と妻とが、現在のこの男と女とであり、自分はその頃空中の精で良く彼等の物語を了知してゐた」と仰せられました。（了）

空中の民

嘗て大聖世尊が逝多林に留まらせられたころ、世尊から禪定の題目を授けられた一人の比丘がありました。彼は逝多林を去つて拘薩羅に赴き、邊境に近い林のうちにわびしい隱栖の庵を結びましたが、不幸にもその庵は、おちつく間もなく忽ちに恐ろしい火災のうちに投ぜられました。比丘は、これを村人に傳へて、あはれみを求むるやうに告げました。「私の棲家は、あとかたもなくやけくづれてしまひました。今、私は悶え苦しんで日をすごして居ます」と。ときに、村人はいちやうに「田も畑も、いまは連日の旱魃のためにかはききつて居る。水をひいて田畑を濕ほすまで、そのやうなことにかゝはつて居るいとまがない」と云ひました。やがて田にも畑にも水が灌がれました。すると、また彼等は云ひました。

「種播きだけはすませておかなくては」と。かくして種播もすみました。それが終ると「柵だけは用意して作つてから」と云ひました。このやうにして、草をとり、刈入れをし、籾も磨き、言葉巧みに村人たちは、その仕事をのみいそぎました。かくて、三ヶ月は流るゝやうに過ぎてゆきました。

この三月の苦しい露天の生活は、比丘にとつて深い思念の日でありましたが、格別にはかばかしい光明の道も展けて來るやうにも思はれませんでした。そのうちに雨期の終りを知らせるバヴーラナーの祭もすぎて、比丘は世尊のもとにかへりました。比丘は敬虔しやかの禮拜をなしをはると、世尊の膝近く侍りました。そのとき、世尊はねんごろに「比丘よ、おんみはこの雨期を體に障もなく暮すことが出來たか、そして又、禪定はおんみに光を與へましたか」と言葉をかけさせられました。比丘は、こゝに、過ぎし日の出來事をのべ、さらに語をついで「世尊よ、私は自分に適はしい家をすら失ひましたので、禪定の道の成就にも達し得

ませんでした」と申しました。世尊は、これにむかつて「汝比丘よ、過去世に畜生であつてすらも、なほかつその身の相應と不相應とをわきまへてゐたに、いまおまへのこれを知らぬといふのはどうしたことか」と云つて、次のやうな過去世の物語をとかれたのでありました。

かつての昔、波羅那斯國が梵摩達多王に治められてゐたころ、菩薩は小鳥に生れました。澤山の小鳥どもも、菩薩を仲間のうちの頭に戴いて、青々と生ひ繁つた大きな木の葉蔭に樂しい月日をおくつてゐました。

ある日のこと、この大きな木の枝がたがひに擦れあつて、はじめは芥のやうなものが落ちてゐるだけでしたが、しだいに煙をあげだしました。いち早く氣のついた菩薩は思ひました。「もし、いま見るやうに枝と枝との摩擦がつゞくなら、きつと火を發して、古い木の葉の全面に焰が燃えうつるにちがひない。いまは一

刻も猶豫してゐるときではない。どこかに逃れることが肝要だ」と。そこで菩薩は次の言葉をくりかへし叫びつゞけました。

「おまへたち、木の枝の葉がくれに宿る空の民よ、地上の木が生みつゝある焔の種子を見なさい。今のところこゝを逃れ去ることが最も安全な道です。私たちが信頼した力強い宿もつひに滅びてゆきます」。

この菩薩の言葉に從つた賢い小鳥どもは、空高くまひ上つてどこかへ仲間と逃れてゆきました。しかし、愚かな鳥どもは囀きました。

「あれはいつもこの調子だ。ほんとにたゞ一滴の水にさへ龍がすんで居ると思つてゐるのだらう」。

むろん、それらは菩薩の言葉に耳も傾けようとせずして留つてゐました。

しかし、それはほんのつかの間でした。菩薩の云つたやうに焔はしだいに勢をまして、木は全く火焔につゝまれてしまひました。煙と焔とにとりまかれた哀れ

な鳥は、煙に眼をさえぎられて逃れるすべもつきはてゝ、一匹一匹と焔のうちにおちてゆくのでありました。

かくて、世尊はさらに「諸々の弟子よ、過去世に於ては、木にすむ鳥すら、なほかつ、身の處すべき道を知つて居た。それにおまへたちのそれを知らないのはなぜでありますか」と仰せられました。この說法をなし終りたまふや、さらにさらに眞理についての御說法がありました。そして、かの比丘はこゝに初果を得たのでありました。

世尊は、最後に「弟子たちよ、佛の弟子たちは、そのときの菩薩の言葉に從つた小鳥どもであつて、私自らはそのときの賢く善い鳥なのでありました」とのべられました。(了)

饒舌の龜

世尊は「この比丘たちは一度ならずおしやべりのために身を滅したのであります」と云つて、次の物語をされました。

かつての昔、波羅那斯國の王梵摩達多の御代、菩薩は王の朝臣として生れられました。そして成長の後、すべての王の顧問役となりました。しかるに、もともとこの王は饒舌家でありました。そして王が話しを話されるとき、たれでもその一言葉もとらへる機會がないほどであつたのです。そして菩薩は、かゝる王の饒舌を止めようと思つて、その諫止の時機をねらつてゐました。

さて、ヒマラヤの山奥のある池に一匹の龜が住んでゐたのです。そして二匹の

若い野生の鵞鳥は、よくその池に餌を探りに來ました。で、ついに龜と見知りあひ、だんだんかれらは親しい友だちになりました。或日のこと、二匹の鵞鳥が龜に云ひました。

「友なる龜よ、私たちはヒマラヤのチッタクータ山の高原に、金洞の住み心地の可い家があるが、一しよにゆきませんか」。

「さうですか、しかし私がゆけませうか?」。

「あゝ、私たちがあなたを連れてゆきますよ。しかし、そのときあなたは口を閉ぢて、たれにでも一言も云つてはいけません」。

「よろしい、さうしませう。ではつれていつて下さい」。

そこで鵞鳥たちは、龜の齒に木ぎれをくわへさせて、その兩端をくわへて空中高く舞ひあがりました。

丁度それは、波羅那斯國の王宮の上を飛んでゐるときでありました。龜は口を

開きました。

「あゝ、私の友だちが、私をかうして連れてはゆくが、しかしおまへたちの厄介になつたといつてくれるな、おまへたちの捕虜になつてたまるもんですか」。

そこで龜は、齒にくわへてゐた木ぎれをはなしてしまつたのです。そして中庭に落ち、二つに割れて死んでしまひました。

「大變なことになつた！龜が中庭に落ちて、二つに割れた」と鷲鳥たちは叫びました。

王や、菩薩や、澤山な朝臣がこの中庭にかけつけました。龜を見た菩薩は、問ひかけました。「人々よ、この龜はどうして死んだのでありませう？」と。そしてまた心に思ひました。「さうだ、時がきたのだ。長いあひだ、私は王に諫言しようと思つてゐた。いまその時がきたのだ。あの龜は、鷲鳥とこゝろやすくなり、そして鷲鳥は龜をヒマラヤに案内しようとして、嘴の間に木ぎれをくわへて、そ

して空を飛んだのだ。そのをり龜は、なにか言葉をきいたので、それに答へようとしたのだ。そして、口を開かないことになつてゐたのに、口を開いたものだから、空から落ちて死なねばならなかつたのだ」と。そこで王に申しました。

「王よ、あの龜は饒舌（おしやべり）がすぎたのです。饒舌ることを禁ぜられてゐながら、饒舌つたので、あのやうな不幸に陷つたのであります」。

そして次の詩をうたひました。

齒のなかに木切れを嚙みて
空飛ぶ龜の
愚かや口を開いて地に落つる
人々よこゝろせよ
口を開くに時を知り

本生物語抄